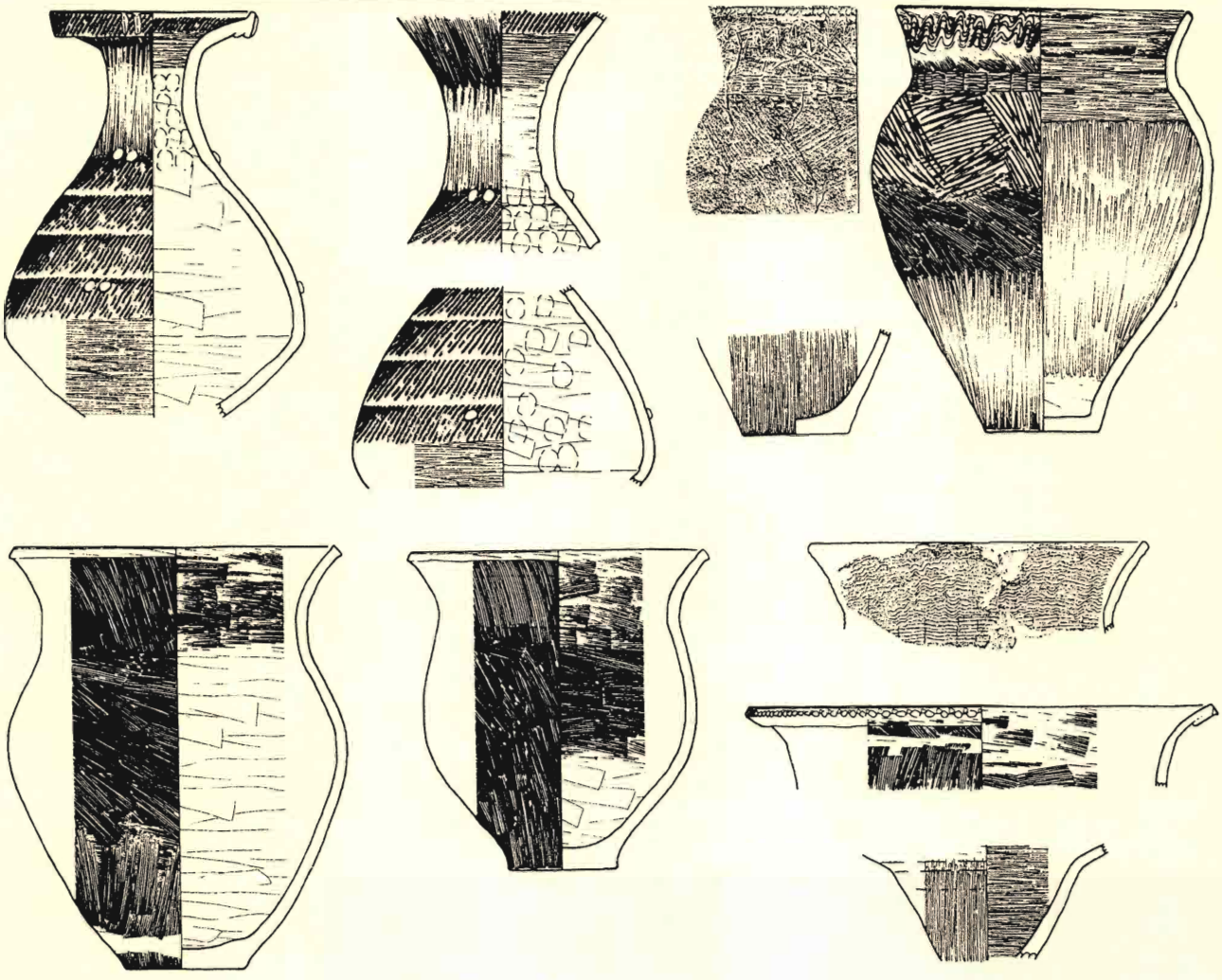
平成１９年度　考古学講座

新神奈川・新弥生論



平成２０（2008）年 ３ 月 ２ 日（日）

神奈川県考古学会

講座「新神奈川・新弥生論」を開催するにあたって

今回の考古学講座は“新神奈川・新弥生論”と題したテーマを設定いたしました。神奈川県考古学会の考古学講座も15回を数え、古墳時代横穴墓、古代、中世を対象とした講座は二順目に入っています。今回は二回目の弥生文化を対象とした講座とします。

前回は後期の環濠集落をめぐって盛り上がりましたが、本講座は弥生時代の全体像を概観できるよう企画しました。弥生文化とはどのような時代であったのか、戦争の時代か、平和の時代か、議論の分かれているところですが、神奈川県における弥生文化はどのように位置付けられるのか、最近調査された遺跡の報告をうけるとともに、集落のとらえかた、石器のみかたなどを通して、多方面から検討したいと思います。

最近の研究経過を踏まえて、新たな切り口でもってこの課題に取り組みたいと今回企画いたしました。また、各発表後理解を深めるため、若干の時間を取りまして会場の皆さんと意見交換の時間を持ちたいとおもいます

本講座を開催するにあたり、限られた時間のなか、要旨執筆ならびに発表いただいた講師の方々に感謝の意を表すとともに、紙上発表への転載に際し御快諾いただいた三ツ橋正夫氏、湘南考古学同好会をはじめ、関係各機関の御協力にお礼申し上げます。

神奈川県考古学会

目　次

講座「新神奈川・新弥生論」を開催するにあたって

開催次第

神奈川県弥生文化遺跡分布図

趣旨説明「新神奈川・新弥生論」 …… 岡本 孝之 … 1

中里遺跡の衝撃 ―南関東農耕形成期の集落― …… 河合 英夫 … 17

三浦半島の弥生時代 ―その発展の軌跡― …… 中村 勉 … 29

弥生文化のなかの縄文系石器の流通基盤 …… 杉山 浩平 … 41

南関東の弥生集落の立地（要旨） …… 浜田 晋介 … 49

大磯町馬場台遺跡出土の土器 ―弥生時代後期初頭の地域事情― …… 立花 実 … 59

弥生後期の大阪と横浜北部 …… 中川 二美 … 71

横浜市 日吉台遺跡群 …… 安藤 広道 … 79

藤沢市No.５７遺跡 …… 三ツ橋正夫 … 89

神奈川弥生初期文化の新知見 ―「集落」遺跡を中心に― …… 谷口 肇 … 93

表表紙　大磯町 馬場台遺跡の土器 （「大磯町馬場台遺跡出土の土器-弥生時代後期初頭の地域事情-」）
裏表紙　小田原市 中里遺跡第Ⅰ地点遺構配置図（「中里遺跡の衝撃-南関東農耕形成期の集落-」）

開　催　次　第

日　時　平成２０年３月２日（日）午前１０時００分～午後４時３０分

会　場　かながわ県民センター　２Ｆ　ホール

―発表次第―

開会挨拶　　神奈川県考古学会　会長　　岡本 孝之

午前の部　　１０：００～１１：１０

１０：00～10：20　趣旨説明「新神奈川・新弥生論」　岡本 孝之

10：20～10：40　神奈川弥生初期文化の新知見―「集落」遺跡を中心に―　谷口　肇

10：40～11：10　中里遺跡の衝撃 ―南関東農耕形成期の集落―　河合 英夫

午後の部　　13：00～16：30

13：00～13：30　三浦半島の弥生時代 ―その発展の軌跡―　中村　勉

13：30～14：00　弥生文化のなかの縄文系石器の流通基盤　杉山 浩平

14：00～14：30　南関東の弥生集落の立地（要旨）　浜田 晋介

14：30～15：00　大磯町馬場台遺跡出土の土器
―弥生時代後期初頭の地域事情―　立花　実

15：15～15：45　弥生後期の大阪と横浜北部　中川 二美

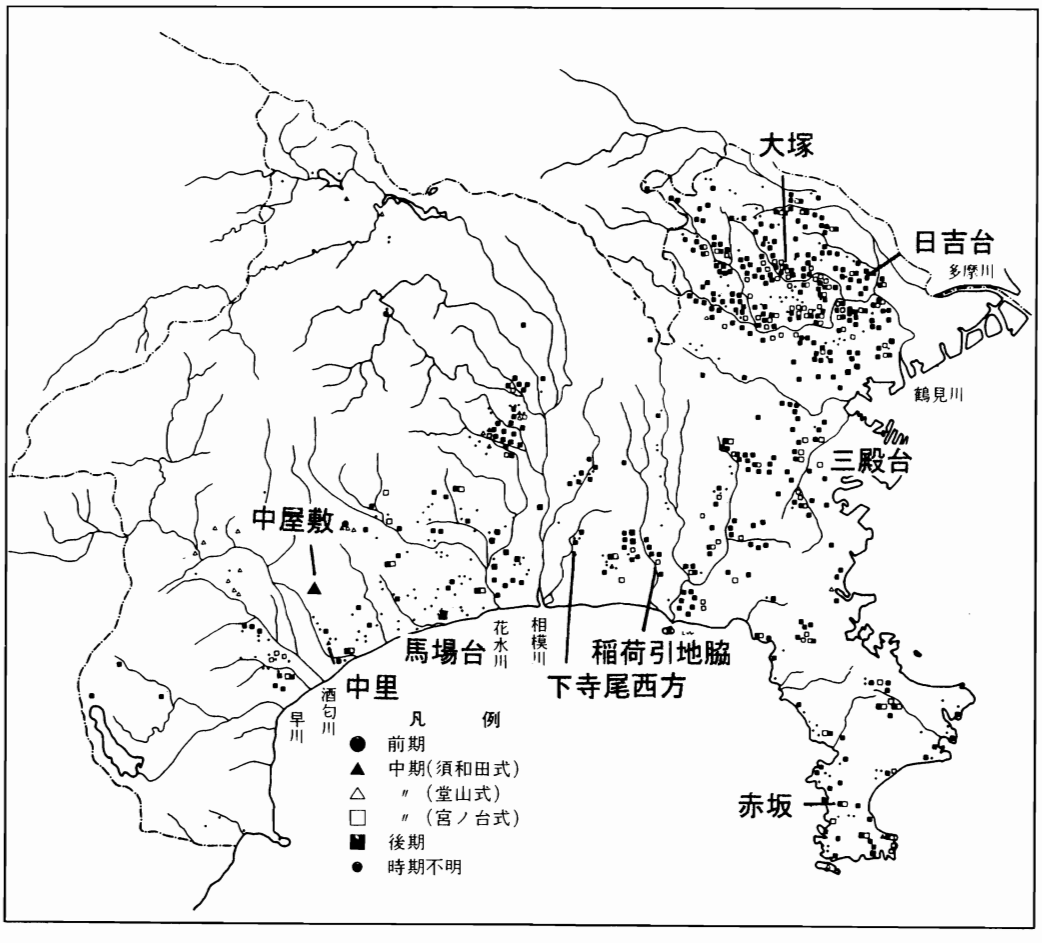
15：45～16：15　横浜市日吉台遺跡群　安藤 広道

16：15～16：30　コメント・質疑

閉会挨拶　　神奈川県考古学会　副会長　　中村 若枝

紙上発表　　藤沢市№５７遺跡　　三ッ橋正夫

神奈川県弥生文化遺跡分布図(1/600,000)



神奈川県の弥生時代

弥生時代は前・中・後期と三区分されていますが、前期の遺跡は秦野市同明遺跡で西日本の土器が持ち込まれているだけで、県内ではまだ縄文時代でした。

県内には約 900 か所の弥生時代遺跡が確認されていますが、中期では約 10 か所の縄文文化の伝統を持つ須和田式土器の遺跡と、約 15 か所の条痕文土器（堂山式土器）の遺跡が丹沢山麓を中心に分布し、東部丘陵地帯には宮ノ台式土器の遺跡が約 130 ヶ所分布しています。

後期になると遺跡数はさらに増加し、500 か所以上の遺跡があり、久ヶ原・弥生町式土器の遺跡が広く分布しますが、後期末の前野町期から次の古墳時代初頭になると遺跡数は減少していきます。

（神奈川県教育委員会　1979　『かながわの遺跡展』の分布図に加筆）

神奈川県考古学会 2007 年度考古学講座　趣旨説明

新 神 奈 川・新 弥 生 論

岡本 孝之

1　新神奈川・新弥生論にむけて

神奈川の弥生文化の特色をもっと主張すべきであるとするのが、私の主張です。私自身の弥生論は、あまり賛同を得ていませんが、自分自身を見失うことのないよう、神奈川の弥生文化の特色を主張したいと思います。埼玉との違い、千葉との違いを認識し、それ以上に異なる様相をみせる茨城との違いこそ、認識したいと思います。同時に今日の、弥生の全体像を概観し、神奈川の弥生を理解していただけたら幸いです。新しい神奈川県考古学会の体制となりましたので、新しい調査成果と弥生文化像を示したく、今回の企画となりました。

2　弥生時代の平和

弥生時代は戦争の時代であるとする意見に賛成するのが、私の 30 年来の考えであり、その戦争は弥生文化内だけでなく、対縄文文化との戦争であったと考えます。関東の弥生文化は、戦争を好まず、平和であったとする意見は、根強いのですが、本当でしょうか。

環壕集落の分布は、宮ノ台式、久ヶ原・弥生町式土器の分布と一致します（第 1 図1）。方形周溝墓の分布も、弥生時代は利根川を越えません。磨製石剣（第 1 図 2、第 2 図）や磨製石鏃（第 1 図 3、第 3 図）の分布も、基本的には同じです。磨製石剣は、茨城県に少数、宮城県に立派なものが 1 点出土していますが、集中するのは南関東です。千葉県ではこの分布図以外にも変則的な磨製石剣が 3 点あります。神奈川県資料については中村勉さんが一度集成していますが、埼玉県で見直した後に神奈川県内を点検しましたら倍増してしまいました。小田原市天神山の石戈（22）は、雑誌『考古学』の小さな記事から当時の新聞をみて探し出したものです。府中小学校の 3 点（23～25）は採集状況が不明です。神奈川県内で最初に確認された資料であることから含めていますが、さらに検討すべきものです。報告書の再検討によって縄文の石器や古墳時代の石製模造品などから見つけ出したものです。磨製石鏃は、千葉県で少数しか確認できないことの理由がわからないところですが、茨城県や栃木県ではさらに少なく、山形県史によれば、山形県米沢に未確認資料があるといわれています。群馬県、埼玉県、神奈川県に集中します。大磯町馬場台遺跡では住居跡から未成品が 2 点出土していて、神奈川県でも石鏃の生産を考えなければなりません（第 3 図右）。昨年のかながわ考古学財団の遺跡調査の発表会で津久井城跡の弥生時代の落し穴から出土していることが報告されました。実物を見せてもらいましたが、破片であって狩猟用と断定はできません。私は磨製石鏃の分布に対応する東北の石鏃は、アメリカ式石鏃であろうと考えています。神奈川県では未発

見でしたが、「貝塚の会」で報告書を見直していましたら、横浜市中里遺跡の報告に 1 点写真があることを発見しました。

鉄器は安藤さんも指摘されていますが、その分布は南関東に集中します。青銅器の分布も同じです。磨製石斧では抉入柱状片刃石斧も同様の分布を示します。これらの分布からみますと、南関東と北関東東部との違いは大きく、単なる土器文化の相違と理解するだけでは実態は理解できないだろうと考えます。同じ弥生文化とすることに疑義をもつことになります。

以上の分布と違って、南関東と北関東に共通するものとして、足洗型石斧（第 1 図 5、第 5 図）や橋場型石斧（第 1 図 4、第 4 図）の分布があります。有角石斧や環状石斧と呼ばれていたものですが、代表的な出土遺跡名をとって私が命名しています。これらは、弥生の石器として認識されてきたものですが、ともに縄文土器文化の石器であるとするのが、私の考えです。環状石斧は縄文の早期からあり、晩期にもあって、その後も盛んに作られます。断面形の隆帯の発達にみられるように展開があります。浜田さんの南加瀬遺跡の発掘では軟質の石材による多頭石斧の破片が出土しています（第 6 図 24）。有角石斧は、弥生の磨製石剣・石戈が大きく変形したものとするのが、森本六爾らの意見で、いまも根強く支持されていると認識します。しかし、この石器は縄文時代後期後半に出現して晩期に各地で発達する白川型石斧（独鈷石、独鈷状石器）が、形式変化したものとするのが私の意見です。

北関東や東北で発達した石器が、なぜ南関東で発見されるのかということの説明は、両者の文化交流の結果であるということができます。北関東系土器の分布の説明も同様です。私は文化交流の形態の一つとして戦争を想定します。

3　環壕集落

環壕集落の規模について、横浜北部地域では折本西原遺跡が最大規模と、安藤さんは指摘しています。埼玉県の研究者はこれを肯定せず、別の解釈を示していますが、そこには現地調査の積み重ねがありません。神奈川県の環壕集落は、他県の研究者からは正当に評価されていません。そこで近年発掘され報告された事例を集めてみました。

中期後半の遺跡分布図については、いくつか作成されたものがありますが、今回はかながわ考古学財団の弥生時代研究プロジェクトチームが 2003 年に作成した図（第 7 図）を利用しました。197 遺跡がまとめられています。この分布図は発掘調査や資料紹介のある資料を中心にまとめたもので、各種の遺跡地図などにある採集資料が含まれていないようです。その図に中期の環壕集落を示してみました。　中期後半の環壕集落は、推定も含めて 38 遺跡確認されます。さらに増加することは必至です。これまでの調査の多くは、台地の全体に及ぶことが少なかったので、周辺調査が徹底していないからです。

環壕集落の図は縮尺を 6000 分の 1 にしてまとめてみました。昨年夏に発掘された藤沢市の稲荷

引地脇遺跡の環壕については、湘南考古学同好会の見学会や先月の藤沢市遺跡調査発表会で知った方も多いと思います。この遺跡は、環壕の覆土から絵画土器が採集されて古くから著名でした。この土器を採集された市川規平さんは、昨年 79 歳でお亡くなりになられましたが（岡本 2007B）、近年の調査で遺跡の広がりがつかめるようになり、大規模な集落遺跡とみなされます。引地川から見ると急傾斜の高低差があり、高地性遺跡とみなしてもよい立地にあります。藤沢市の速報展に、はじめて出品された有頭石錘は、上下非対称の白川型石斧（独鈷石）と判断しました。重さ 3 kg と最重量級です。古い採集品ですが、弥生時代中期後半の遺物とみなせます。環壕は、台地先端から内側 200～300mに東西に横断するように発見されています。外側にも住居や方形周溝墓が発見され、さらに外側に広がります。台地先端から 400mまで住居が発見されています。石名坂遺跡の環壕は後期で時期が違います。

茅ヶ崎市の下寺尾西方遺跡が注目されます。昨年の茅ヶ崎市遺跡調査発表会と展示会で発表された資料の提供を受けて、少し私なりの手を加えてあります。谷口さんも指摘されていますように環壕の拡大率は最大です。折本西原遺跡と同じ規模があります。方形周溝墓などの墓地が未発見です。

4　講座の概要

今回の講座では、弥生の始まりから終わりまでを概観します。原始から古代への変換点をみることにします。弥生時代は、現在と対比できる変化の時代です。

大井町中屋敷遺跡の発掘をふくめて古い時期について、神奈川県教育委員会の谷口肇さんにお願いしました。戦争前に乳児骨が入った土偶が出土して著名な遺跡です。最近昭和女子大学によって発掘調査が実施され、炭化米が出土して注目されました。私は、この時期はまだ縄文文化であると考えていますので、今回の講座に含むことに躊躇しましたが、注目すべき発掘に違いありません。秦野市平沢同明遺跡の壺棺として利用された弥生時代前期の完全土器があります。再発掘され第 29 回の発表会で発表されました。

小田原市中里遺跡は、1999 年に大規模に発掘されて現地説明会に 1 万人の参加という記録を作ったことは大きな驚きでした。まだ未報告ですが、神奈川県の弥生文化を考えるうえでは、欠くことのできない遺跡です。関東の弥生文化は中里遺跡が最初と、私は考えています。報告書を早くみたいという願望をこめて、河合英夫さんにお願いしました。京浜急行の神奈川新町駅近くにある玉川文化財研究所に所属されています。第 23 回発表会で報告されています。

中村勉さんは、中期後半からの三浦半島の代表的集落である三浦市赤坂遺跡を長く発掘調査を続けられています。赤坂遺跡の見学会を本会も企画しましたが悪天候のため、流会となってしまいました。三浦市には赤坂遺跡の学習室が公開されています。中村さんは昨年、横須賀市の『市史研究横須賀』第 6 号に「三浦半島における弥生時代集落のモデル―平作川流域における二つの遺跡―」と題して、中期後半と後期の遺跡群の展開についてまとめています。

杉山浩平さんは、きょう一番の若手です。小田原の杉山幾一先生のご長男で、中里遺跡の西日本系土器の存在を早くに指摘していました。近年は弥生の石器について精力的に調査研究を進めています。石器の研究は、もっと進めなければならないと思います。「弥生文化のなかの縄文系石器の流通基盤」と題する発表です。西相模考古学研究会では、私と渡辺外さんと杉山さんの三人が石器研究三羽烏です。

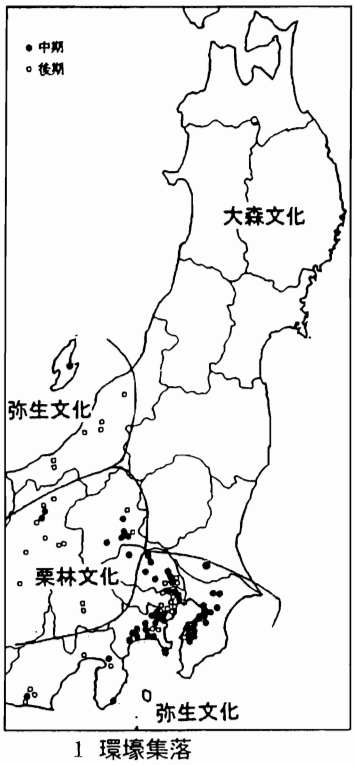
川崎市市民ミュージアムの浜田晋介さんは、弥生時代を中心に精力的に研究を進めておられます。南加瀬の古墳を発掘したり、下原の縄文晩期の未整理資料を整理報告したり、朝光寺原式土器の研究、石皿や磨石などの研究を進め、畑作の評価では安藤さんと論争を進めています。いまは、井田にあった東神庭遺跡の整理を進められているとのことです。今回は、「南関東の弥生集落の立地（要旨）」について発表していただきます。

伊勢原市教育委員会の立花実さんは、1月の遺跡調査研究発表会に続いて重ねてお願いしました。昨年刊行された大磯町史では、一緒に弥生時代をまとめました。いままで長く不明であった後期前半の資料が、大磯町馬場台遺跡などで見えてきました。山梨県方面につながるものと、静岡県西部の土器が関係しています。立花さんは西相模考古学研究会の機関誌『西相模考古』の編集長で、神奈川県考古学会ではたびたび考古学講座で発表をお願いしています。

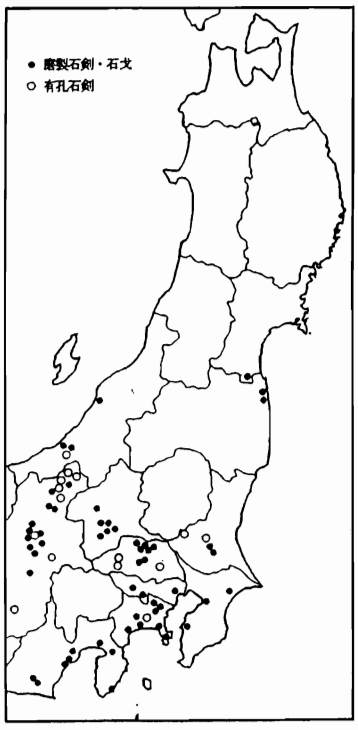
横浜市歴史博物館の中川二美さんには、後期後半の横浜市北部の遺跡群について、とくに西日本との関係を整理してもらいたいとお願いしました。中川さんが、大阪大学のご出身で都出比呂志さんのお弟子さんですので、西日本と関東をつなぐ星のもとにあります。近江の弥生文化を研究したとのことです。関東の弥生は、西日本とは異質で劣るとするのが、森本六爾の見方でした。この見方は克服されてはいない、というのが私の研究史観です。中川さんはどうなのか、期待するところは大きいのです。

中川さんの前の前の横浜市歴史博物館の考古学の学芸員であった安藤広道さんは、今は慶応大学の先生です。昨年春に私も参加した日吉の大学構内の遺跡調査について発表をお願いしました。後期終末の横浜市日吉台遺跡は、戦前に私の先生であった西岡秀雄、清水潤三先生たちが弥生の集落を発掘しています。集落遺跡の最初で、その当時の最大規模の住居跡がコンクリートで固められて、今も保存されています。私が中学生のころ、甲野勇の監修で朝日新聞に「三多摩むかしむかし」という連載ものがありました。そこに登呂遺跡とならんで日吉遺跡が登場します。校舎の建替えにともない、発掘調査がおこなわれました。清水先生の発掘した住居は残っていませんでしたが、校舎の間の狭い空間に後期末では最大級の住居が発見されました。新聞発表したところ、1000人もの見学者が列をなしました。1月の発表会では、隣接する観音松古墳の再検討の成果を発表してもらいましたが、今回は関係する集落の調査です。日吉台遺跡の報告は70年ぶりです。

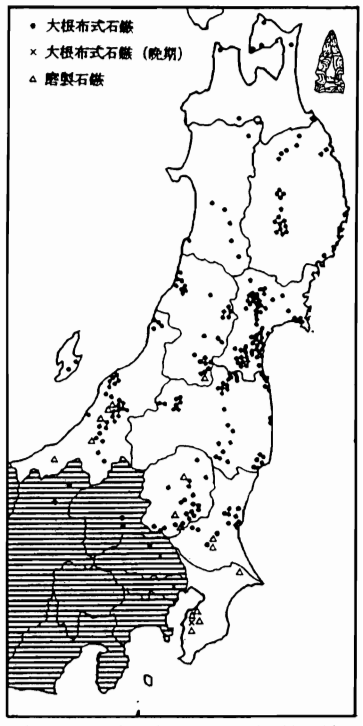
なお、私の資料は、昨年刊行された『大磯町史』考古編にまとめたものに手を加えたものです。石器の縮尺は、4分の1にしました。



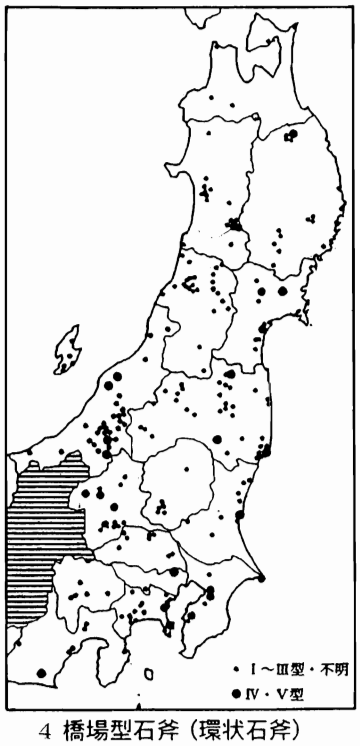
1 環壕集落



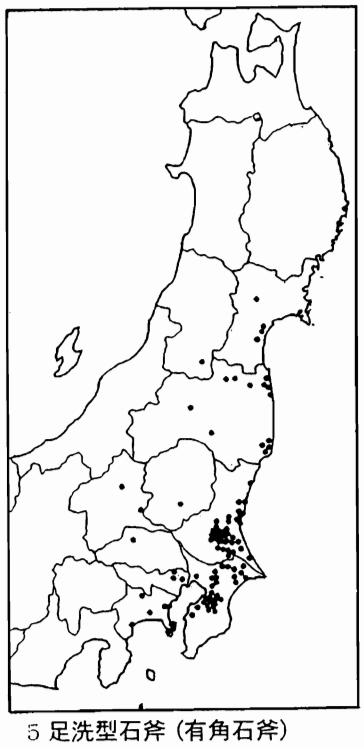
2 磨製石剣



3 磨製石鏃と大根布型(亜米利加式)石鏃
（トーンは磨製石鏃分布域）



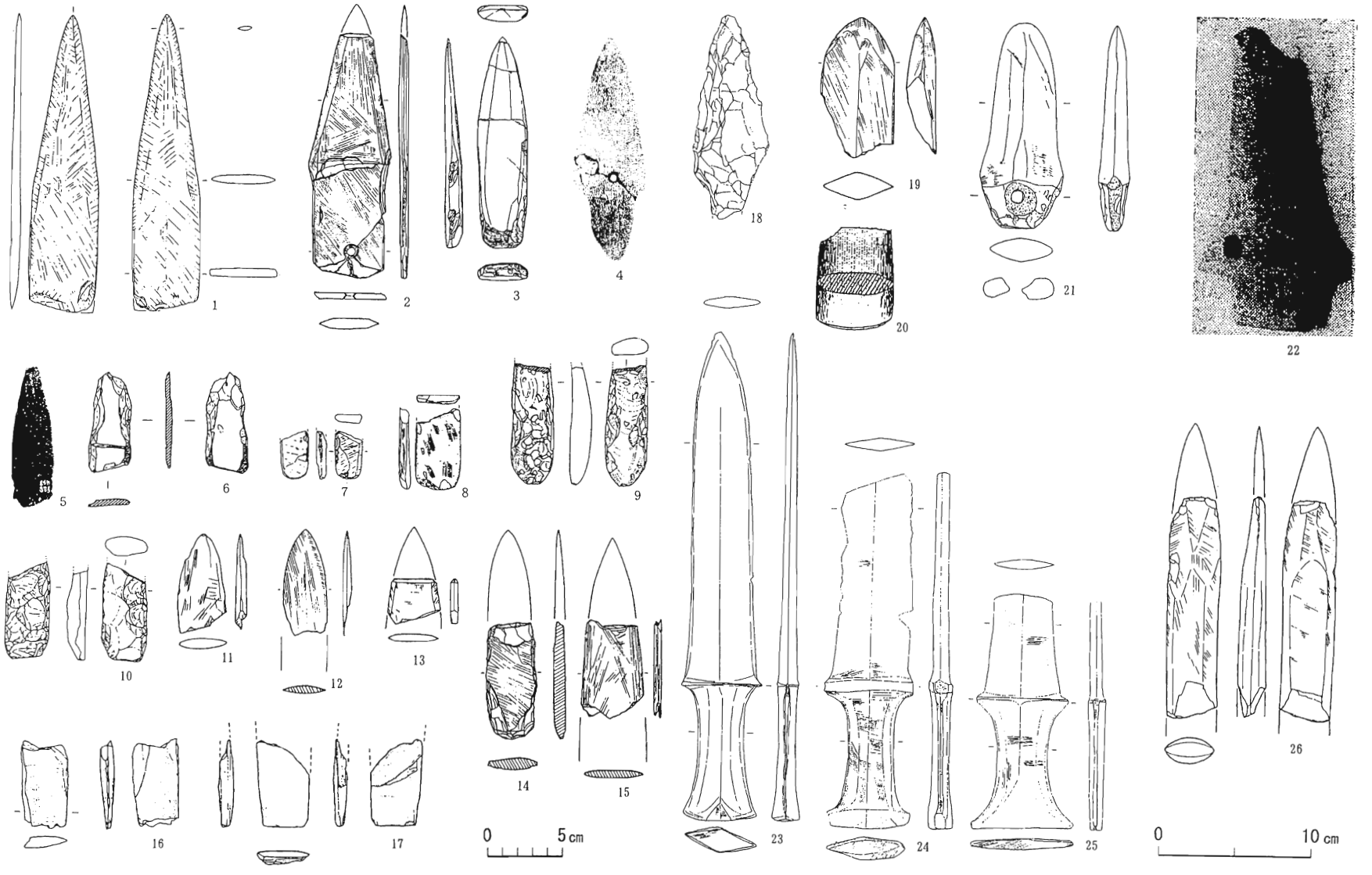
4 橋場型石斧（環状石斧）



5 足洗型石斧（有角石斧）

弥生系	縄文系
1 弥生文化	大森文化
（栗林文化）	
環壕集落	
2 磨製石剣	
石戈	
3 磨製石鏃	大根布型石鏃
4	橋場型石斧
	（環状石斧）
5	足洗型石斧
	（有角石斧）
	白川型石斧
方形周溝墓	
鉄器	
抉入片刃柱状石斧	

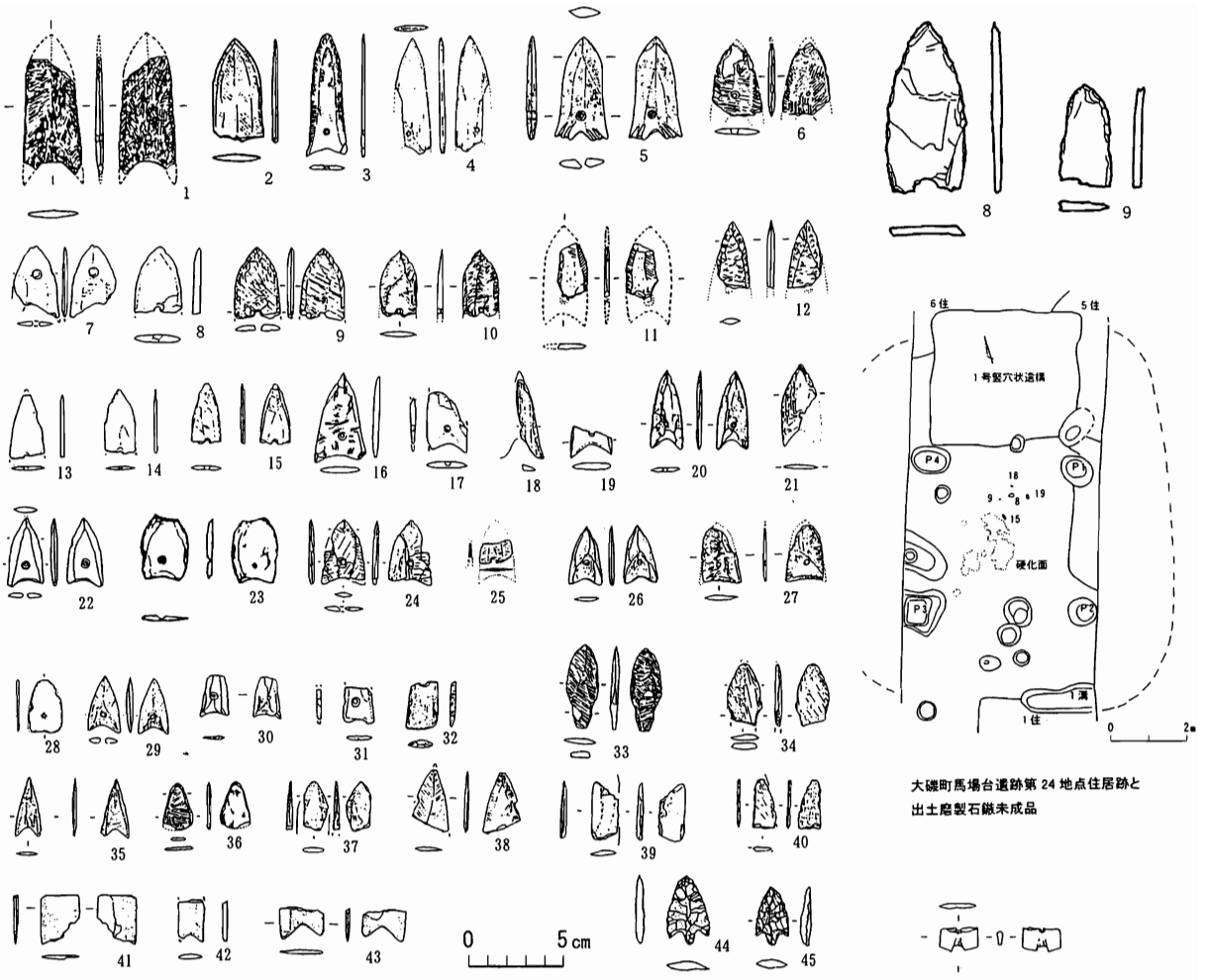
第 1 図　弥生系分布 1～3 と縄文系分布 3～5（岡本 2007）



1 厚木市宮ノ里、 2・12・14・15三浦市赤坂、 3 横浜市大塚、 4 鎌倉市南御門、 5 大磯町石神台、
6 小田原市羽根尾堰ノ上、 7 同久野山神下V、 8 同千代吉添、 9・10 横浜市三殿台、 11 平塚市南原、
13 鎌倉市手広八反目、 16・17逗子市池子

18 小田原市千代周辺(打製石剣)、 19 同高田北之前、 20 同小田原、 21 海老名市杉久保、
22 小田原市天神山(石戈)、 23～25 同中里周辺、 26 逗子市池子

第 2 図　神奈川県の磨製石剣(岡本 2007)



大磯町馬場台遺跡第 24 地点住居跡と出土磨製石鏃未成品

佐原城跡(かながわ考古学財団 2002)

1・11 藤沢市大源太、2・5・41・43 逗子市池子、3 横浜市日野町、4 平塚市原口、
6 横浜市受地だいやま、7 平塚市根岸B、8 三浦市間口、9 横浜市桂台北、10・14・27 同三殿台、
12 大和市月見野、13・42 横須賀市ひる畑、15茅ヶ崎市臼久保、16川崎市影向寺、17・31三浦市赤坂、
18寒川町倉見才戸、19横須賀市佐原泉、20横浜市大口台、21平塚市中原上宿、22藤沢市若尾山、
23 厚木市子ノ神、24・34・35・37・39・40 秦野市砂田台、25横浜市西富士塚、26 秦野市下大槻峯、
28 小田原市千代、29 横浜市関耕地、30 厚木市愛名鳥山、32 小田原市久野一本松、
33・36・45 平塚市真田北金目、38 茅ヶ崎市下寺尾西方A、44 藤沢市大庭城山(44・45 は大形打製石鏃)

第 3 図　神奈川県の磨製石鏃と大磯町馬場台遺跡の未成品(岡本 2007)

<文　献>

岡本孝之　1999　「神奈川県の磨製石鏃」『湘南考古学同好会々報』77

岡本孝之　1999　「足洗型石斧の研究」『考古学雑誌』84－3

岡本孝之　2000　「関東の環状石斧」『西相模考古』9

岡本孝之　2003　「茨城県における弥生文化観の再検討」『茨城県史研究』87

岡本孝之　2004　「南関東環壕集落の性格」『考古学ジャーナル』511

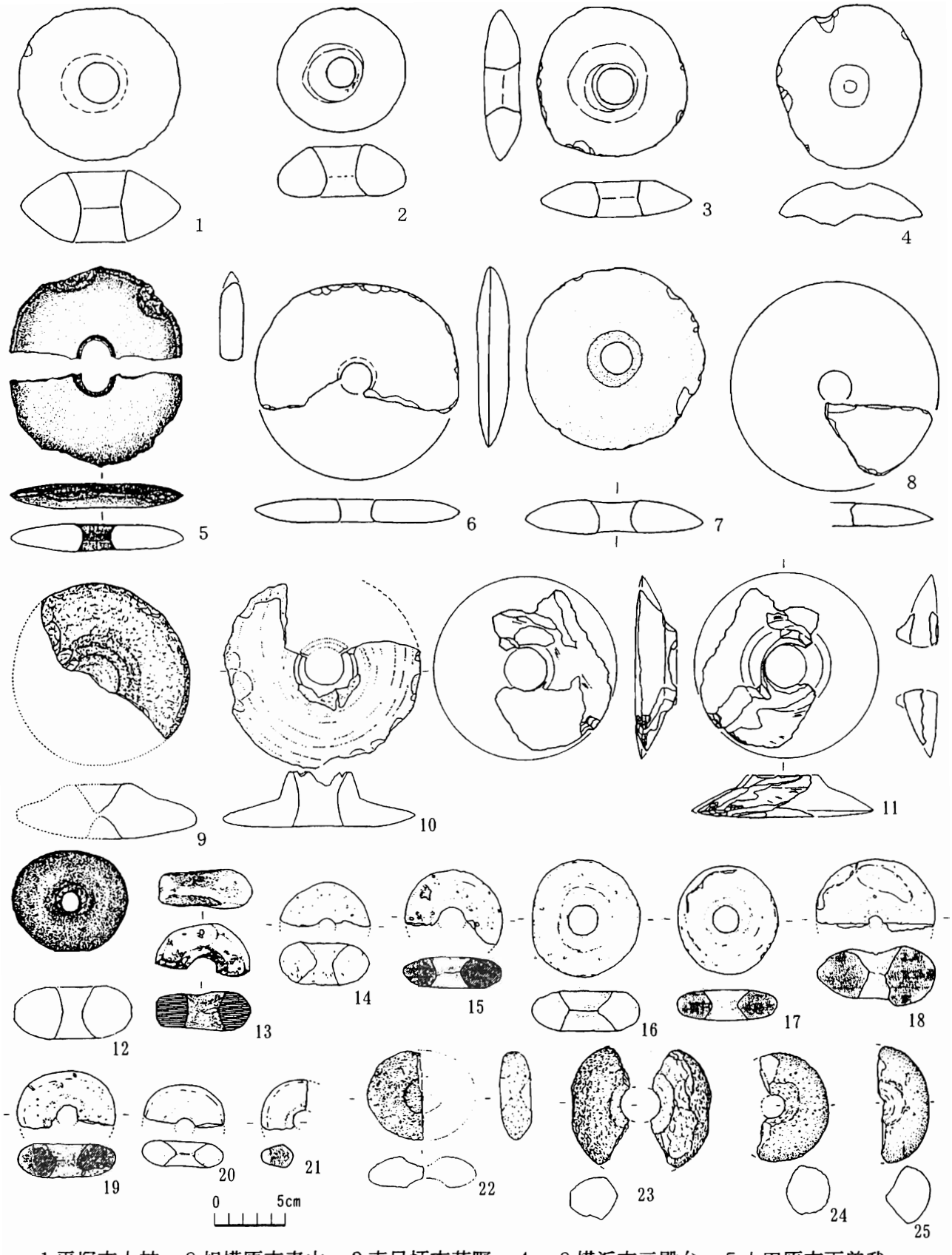
岡本孝之　2007　「弥生時代」『大磯町史』考古編

岡本孝之　2007　「市川規平の全仕事」『湘南考古学同好会々報』109

小出輝雄　2006　「環濠は戦争用遺構か―南関東弥生時代中期後半の検討から―」『古代』119

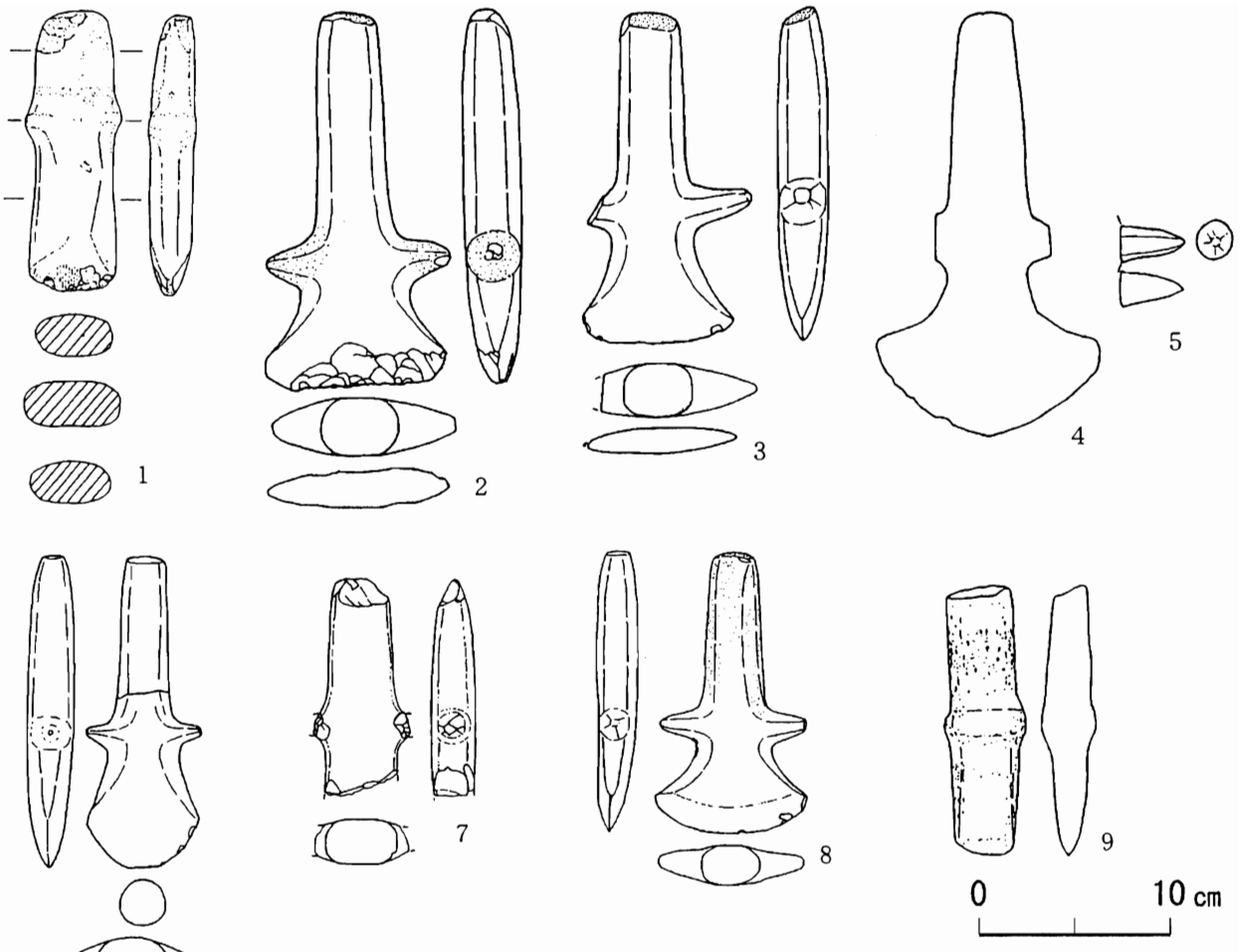
立花　実　2007　「弥生時代後期の社会」『大磯町史』考古編

かながわ考古学財団 弥生時代研究プロジェクトチーム　2003　「宮ノ台式土器の研究(2)」
『かながわの考古学　研究紀要』8



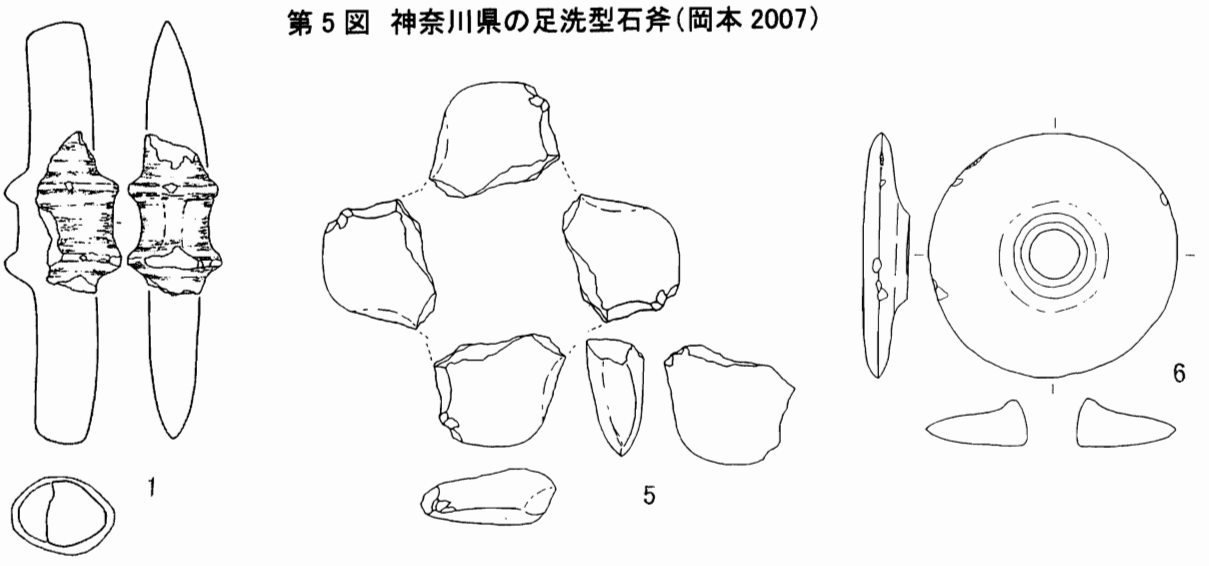
1 平塚市大神、 2 相模原市青山、 3 南足柄市苅野、 4・9 横浜市三殿台、 5 小田原市下曽我、
6・12 厚木市子ノ神、 7 川崎市梶ヶ谷神明社上、 8 三浦市間口、10 横須賀市佐原泉、
11 茅ヶ崎市西方A、13 小田原市羽根尾堰ノ上、14～21 同三ッ俣、22 秦野市砂田台、
23 横浜市大口台、24・25 寒川町倉見才戸

第 4 図　神奈川県の環状石斧（岡本 2007）



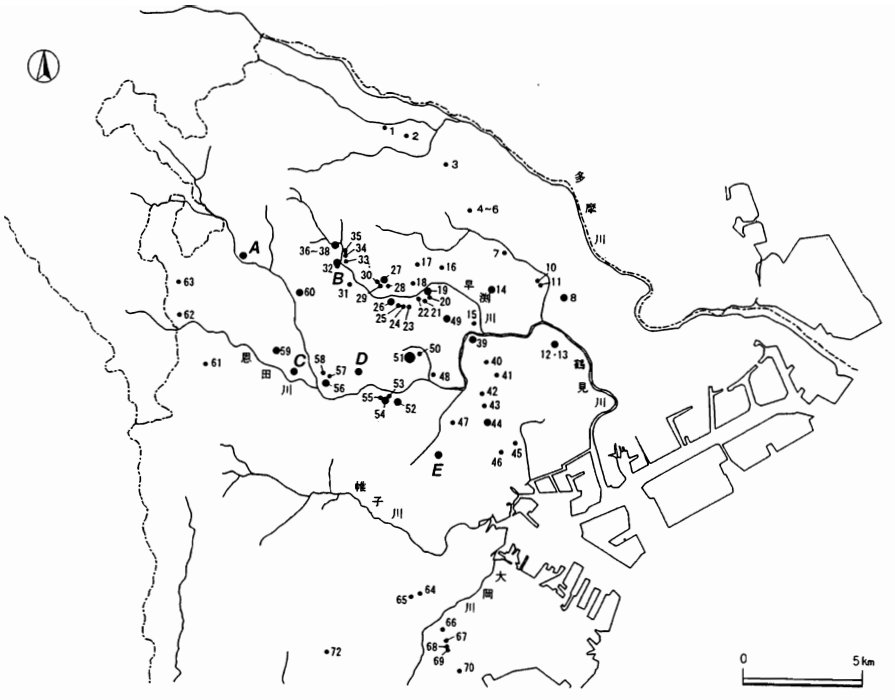
1・7 横浜市三殿台、2 小田原市多古、3 愛川町六ッ倉諏訪、4 三浦市金田走湯神社、5 横須賀市佐原泉、6 寒川町倉見才戸、8 三浦市赤坂、9 横浜市折本西原

第 5 図　神奈川県の足洗型石斧（岡本 2007）

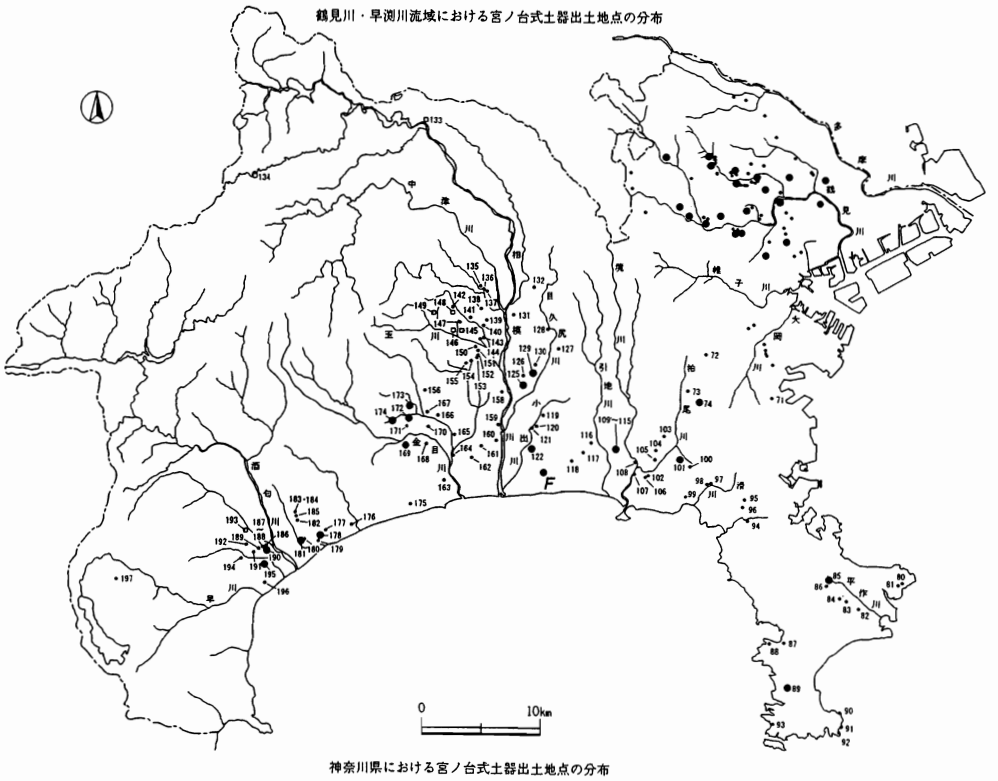


第 6 図　神奈川県の縄文系呪術石斧追加

1平塚市真田北金目、5川崎市南加瀬（浜田 1996）、6横須賀市矢ノ津坂遺跡（かながわ考古学財団 2006）



鶴見川・早渕川流域における宮ノ台式土器出土地点の分布

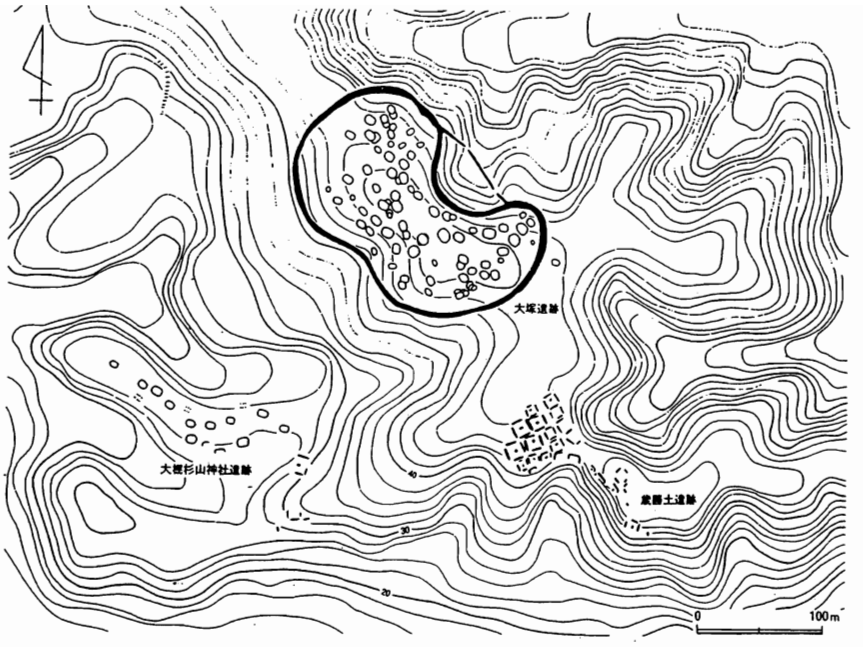


神奈川県における宮ノ台式土器出土地点の分布

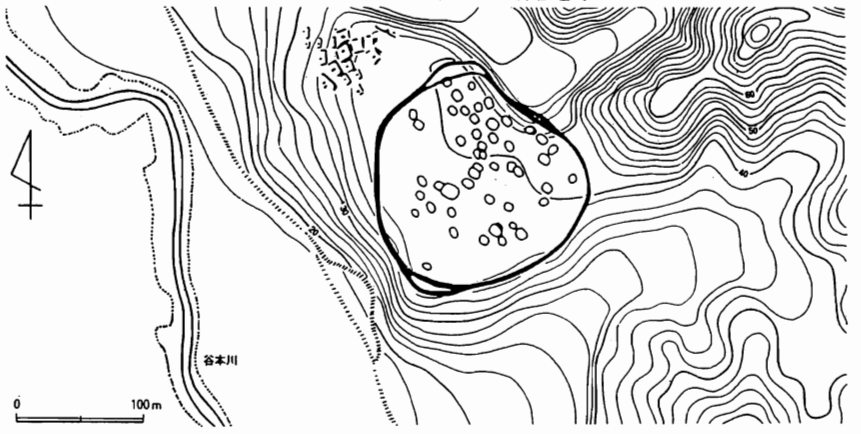
環壕集落（中期）

8 川崎市南加瀬遺跡　12 横浜市梶山遺跡　14 森戸原遺跡　19 権田原遺跡　26 綱崎山遺跡　27 大塚遺跡　36 観福寺北遺跡　38 関耕地遺跡　39 牢尻台遺跡　44 西富士塚遺跡　49 宮ノ原遺跡　51 折本西原遺跡　52 住吉神社北遺跡　54 宿根北遺跡　56 佐江戸宮原遺跡　59 藤林遺跡　60 朝光寺原遺跡　74 上倉田第一　85 横須賀市蛭畑遺跡　89 三浦市赤坂遺跡　101 鎌倉市水道山戸ヶ崎遺跡　109～115 藤沢市稲荷・引地脇遺跡　120・121 茅ヶ崎市下寺尾西方遺跡　125 寒川町倉見才戸遺跡　130 海老名市本郷中谷津遺跡　169 平塚市原口遺跡　172 真田神社周辺遺跡　173 秦野市根丸島遺跡　174 砂田台遺跡　178 小田原市国府津三ッ俣遺跡　181 中里遺跡　190 多古白山遺跡　195 小田原遺跡　A 川崎市早野遺跡　B 横浜市柚木台（矢崎山西）遺跡　C 谷津田原遺跡　D 池辺第 28（薮根不動原）遺跡　E 三枚町西ノ脇遺跡　F 茅ヶ崎市居村遺跡　（かながわ考古学財団 2003 の分布図に加筆）

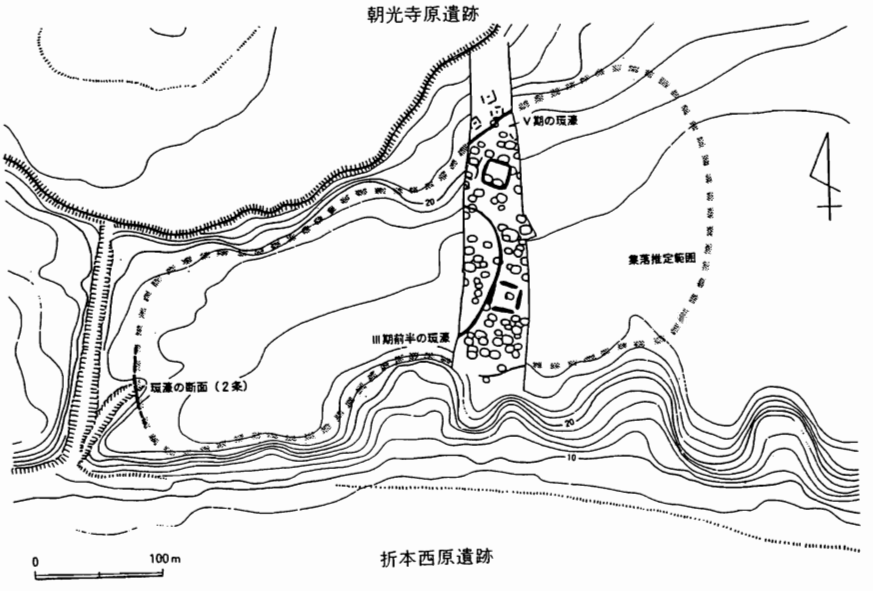
第 7 図　神奈川県の宮ノ台期遺跡分布と環壕集落（かながわ考古学財団 2003 に加筆）



大塚・歳勝土遺跡、大棚杉山神社遺跡



朝光寺原遺跡



折本西原遺跡

第 8 図　宮ノ台期の環壕集落（1）（安藤 1991）

稲荷引地脇(藤沢市No.57)遺跡調査歴

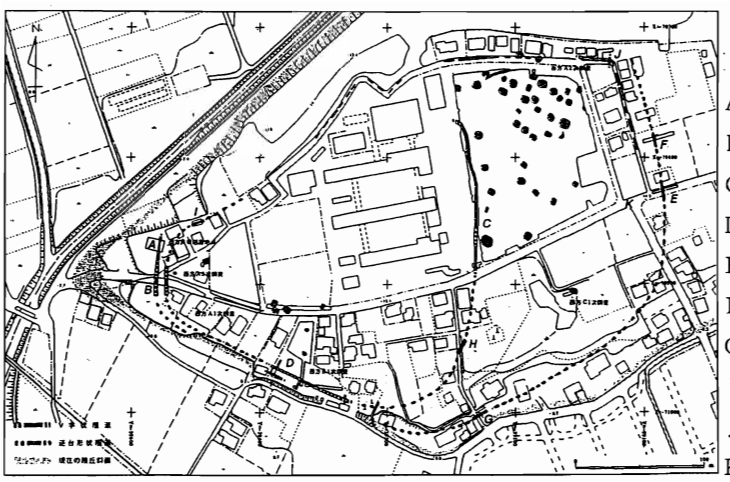
地点		中村No.	調査年	調査者	所在地	発表会・備考
酒詰地点			1944		第二滑走路南端	酒詰 1967
市川地点		③	1948	市川	東側滑走路南端	市川 1984
U地点	石名坂 1	⑥	1965	寺田	石名坂 6083	寺田・中島 1978
石名坂	石名坂 2	⑦	1979	寺田	石名坂 6084	寺田・中島 1979
	引地脇 1	③	1989	寺田	稲荷 1 丁目 127－2	市川地点と一致
A地点	引地脇 2	④	1992	戸田	稲荷 1 丁目 18－1	(10)
O地点	石名坂 3	⑧	1995	田代	稲荷 1 丁目 127－17	(13)田代 1997
A地点	引地脇 3	⑤	2004	田代	稲荷 1 丁目 122－1	(22)
N地点	石名坂 4	⑨	2004	戸田	稲荷 1 丁目 127－8	(22)坪田 2005
N地点	中郷 1	⑨	2004	戸田	稲荷 1 丁目 127－86	(22)坪田 2005
		(⑩)	2007	宮田	本藤沢 2 丁目 6067－1	(25)

中村No.は中村哲也 2007 の地図の地点No.を示す　⑩は岡本の追加

発表会は藤沢市遺跡調査発表会No.を () 内に示す

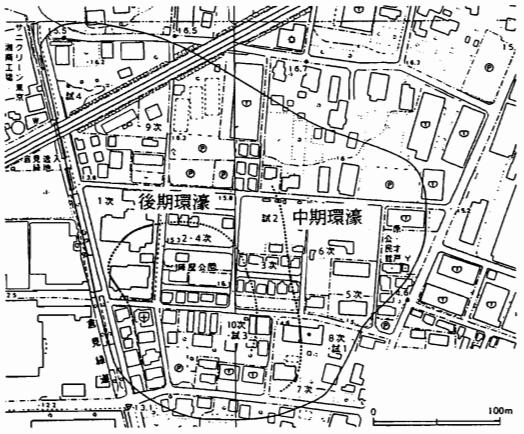
A～O地点は稲荷台地遺跡群調査による地点No.で、U地点はその後に追加された

第 9 図　宮ノ台期の環壕集落(2)　藤沢市稲荷・引地脇遺跡(中村 2007 に加筆)



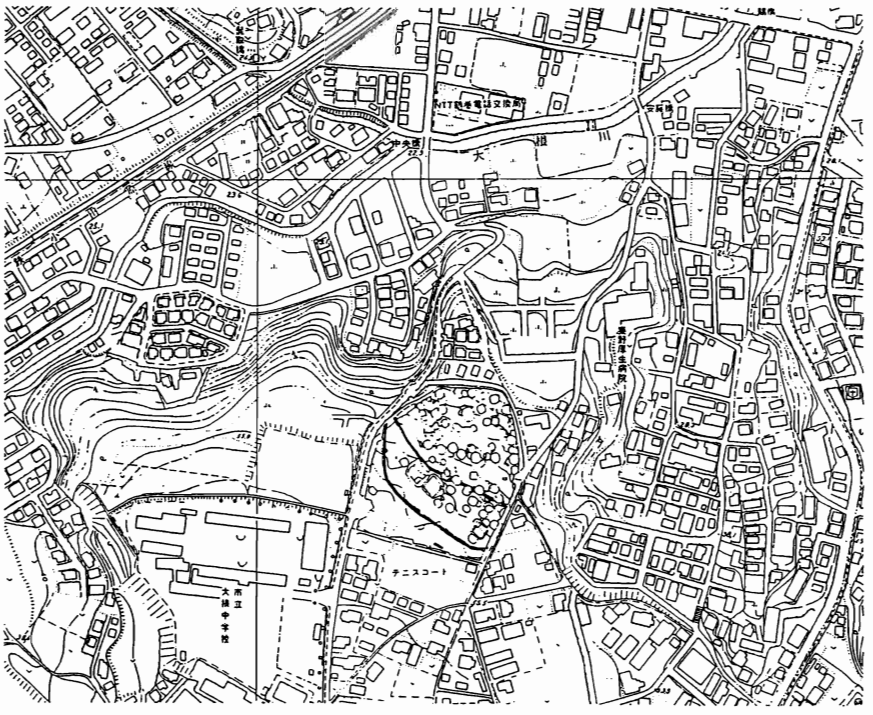
茅ヶ崎市下寺尾西方遺跡（茅ヶ崎市原図に加筆）

A岡本勇 1969 調査（岡本）
B茅ヶ崎市 1986 調査（富永 1988）
Cかながわ考古学財団 2002 調査（村上 2003）
D茅ヶ崎市 2002 調査（大村 2004）
E神奈川県 2005 調査（谷口 2006）
F茅ヶ崎市 2006（富永 2006）
G・H茅ヶ崎市 2006・2007 調査（大村 2007）
I茅ヶ崎市調査（大村 2007）
J茅ヶ崎市 1991 調査（富永 1994）
K茅ヶ崎市 2007 調査（藤井 2007）



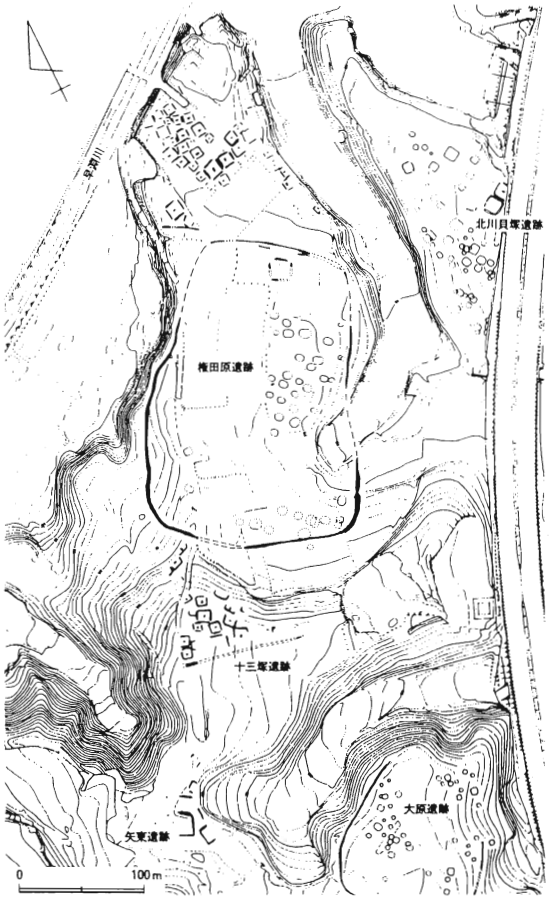
寒川町倉見才戸遺跡（押木 2006）

①田村良照・中村哲也 2004
③小林秀満 1999
⑥林原利明 2005
⑦押木弘己 2005
⑧中村喜代重 2005
⑨押木 2006



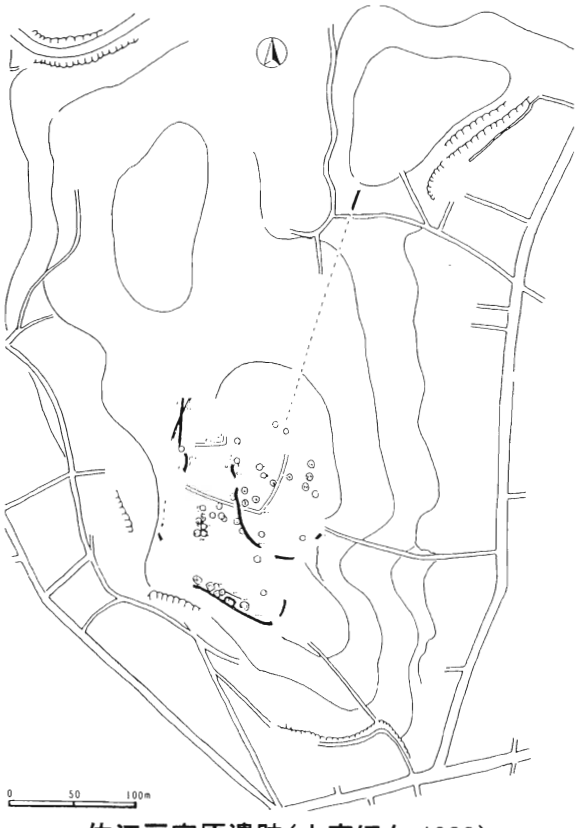
秦野市砂田台遺跡
（宍戸 1991）

第 10 図　宮ノ台期の環壕集落(3)

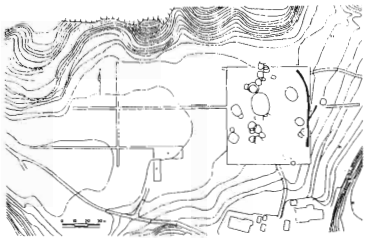


権田原・十三塚・矢東遺跡

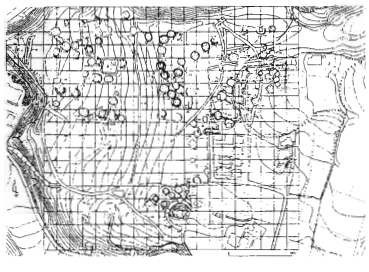
権田原遺跡(安藤 1991)



佐江戸宮原遺跡(小宮ほか 1988)

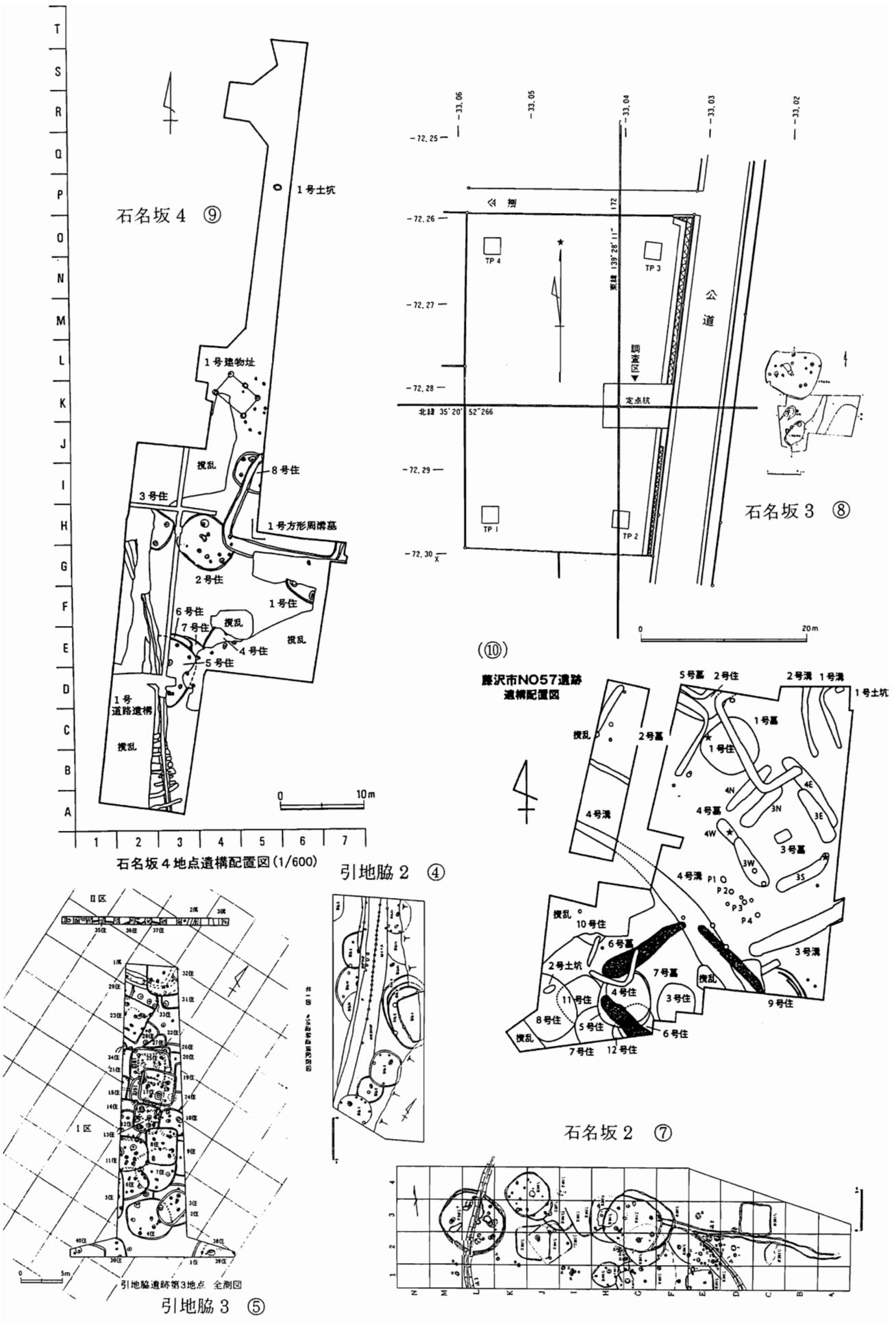


横浜市森戸原遺跡(小宮ほか 1988)

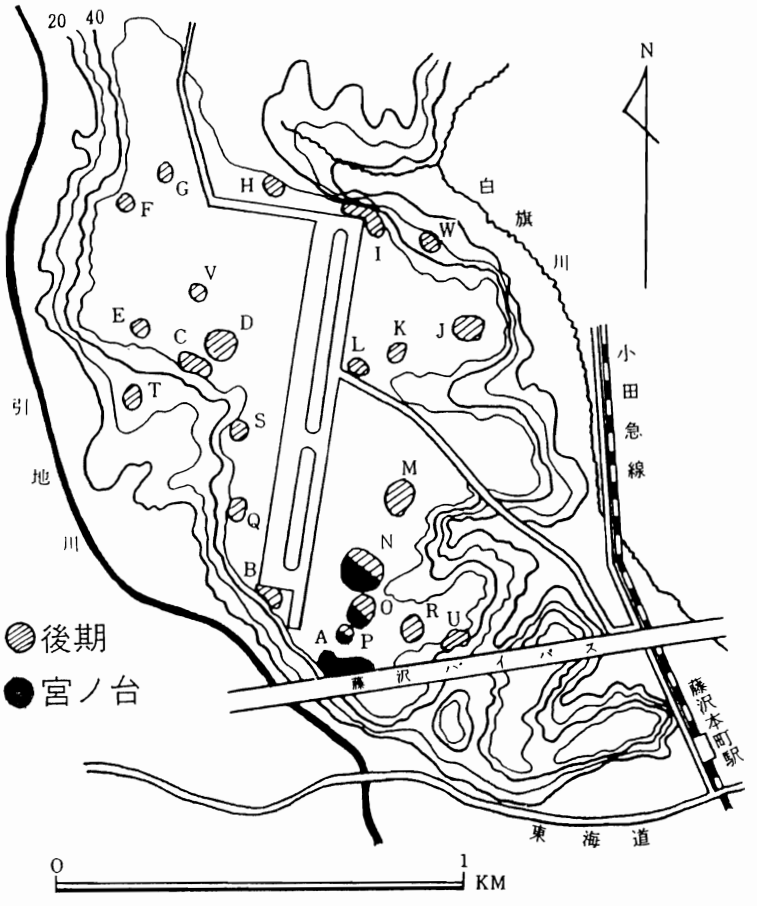


綱崎山遺跡

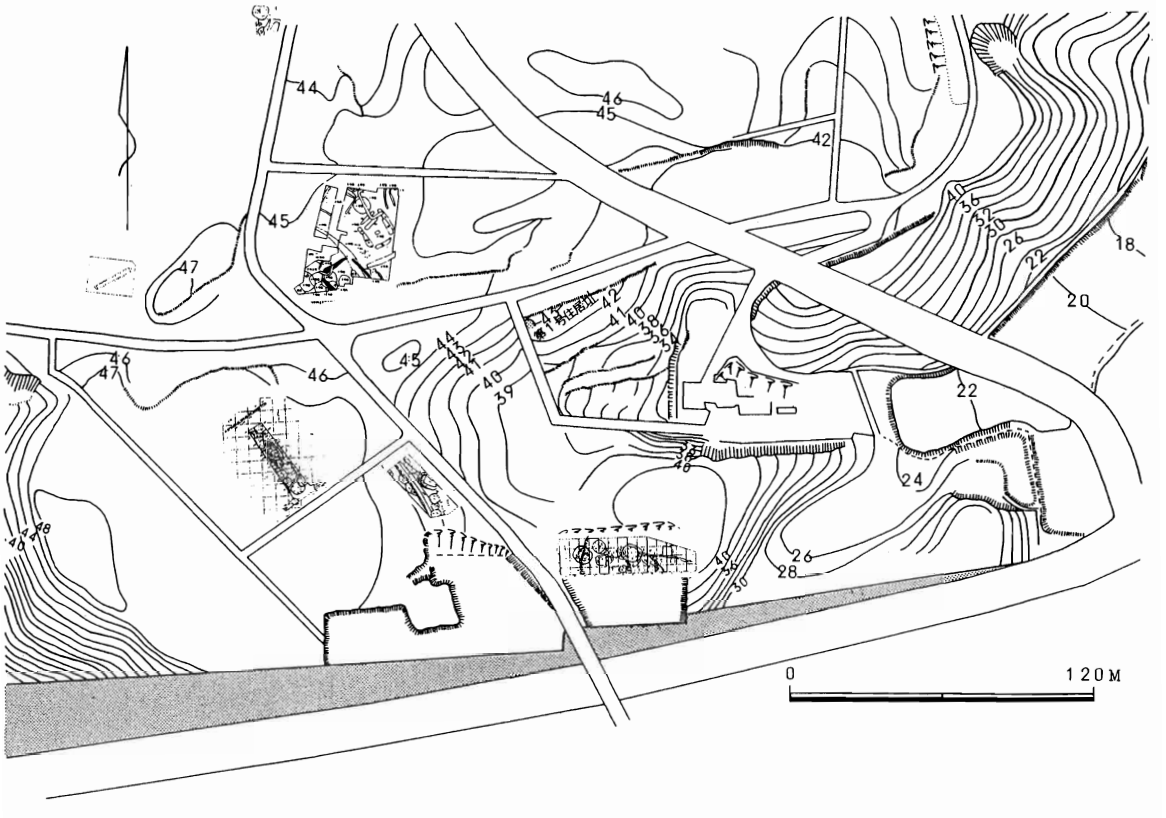
第 11 図 宮ノ台期の環壕集落(4)



第 12 図 稲荷引地脇遺跡 弥生中期関係調査地点(縮尺 1／600)



第 13 図　稲荷台地の弥生中期遺跡分布図（田代 1997）（縮尺 2 万分の 1）



第 14 図　稲荷引地脇遺跡全体図（寺田他 1978 に加筆）（縮尺 3000 分の 1）

中里遺跡の衝撃　－南関東農耕形成期の集落－

河合 英夫

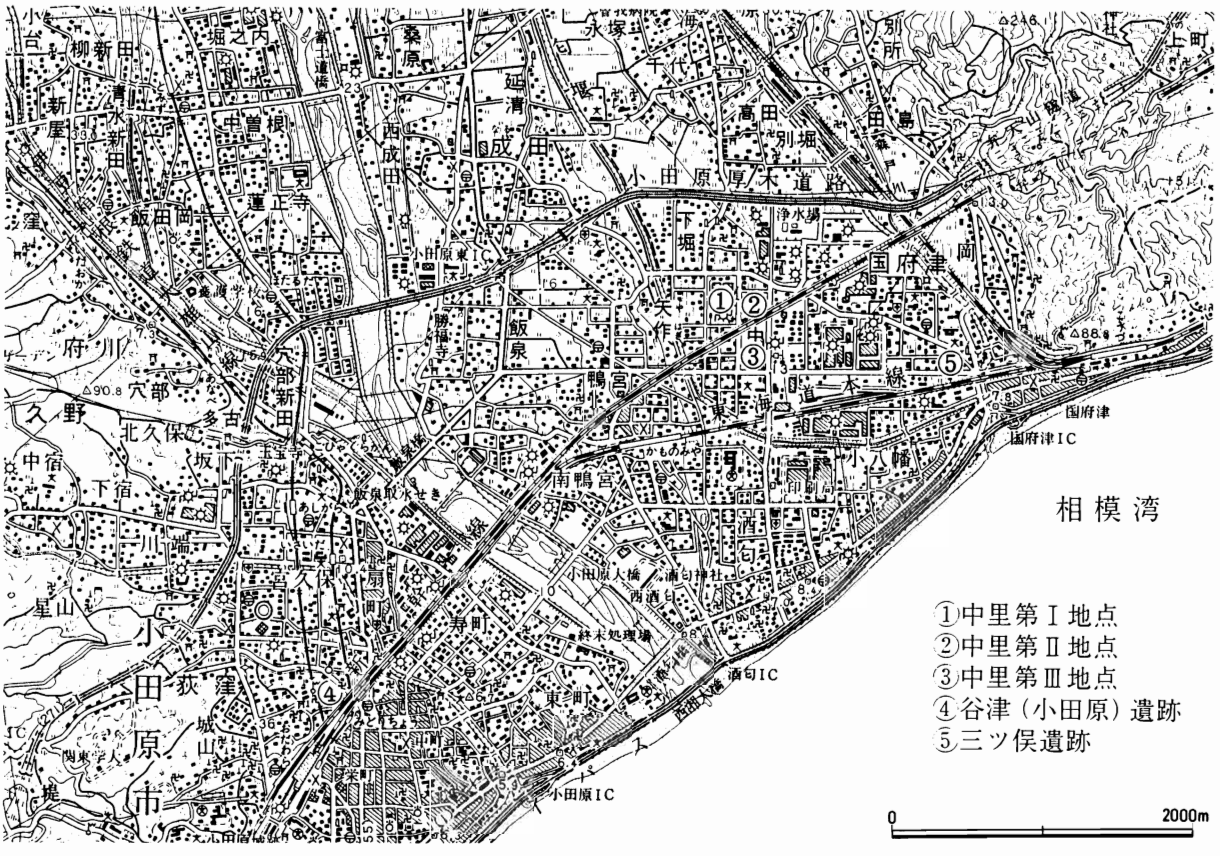
1．はじめに

北部九州に伝わった水稲農耕文化は瞬く間に西日本一帯に広がり、列島を北上し、前期末には本州の北端まで達する。新たに出現した水田耕作をその指標とする弥生時代の到来である。

箱根の山を越えた本格的な弥生文化はいつ、どのようにしてはじまったのだろうか。

南関東における弥生文化の展開は、中期前半までは縄文晩期からの伝統が顕著であるのに対して、中期後半の宮ノ台期に至ると、突如、環濠集落を中心とする本格的な農耕集落が出現する。とくに後者については、東海方面からの移住者によってもたらされたとする見解と、漸次的な段階を経て、宮ノ台期の社会が形成されたとする二通りの見解があったが、平成10年から11年にかけて行われた小田原市中里遺跡の「中期中葉」の発掘調査成果は、この二つの見解に修正を迫るものとなった。

中里遺跡が南関東における弥生文化の大きな転換期であることを、当該期の方形周溝墓群の発見以来、想い描いてきたが、すべてにおいて予想を超える内容となった。



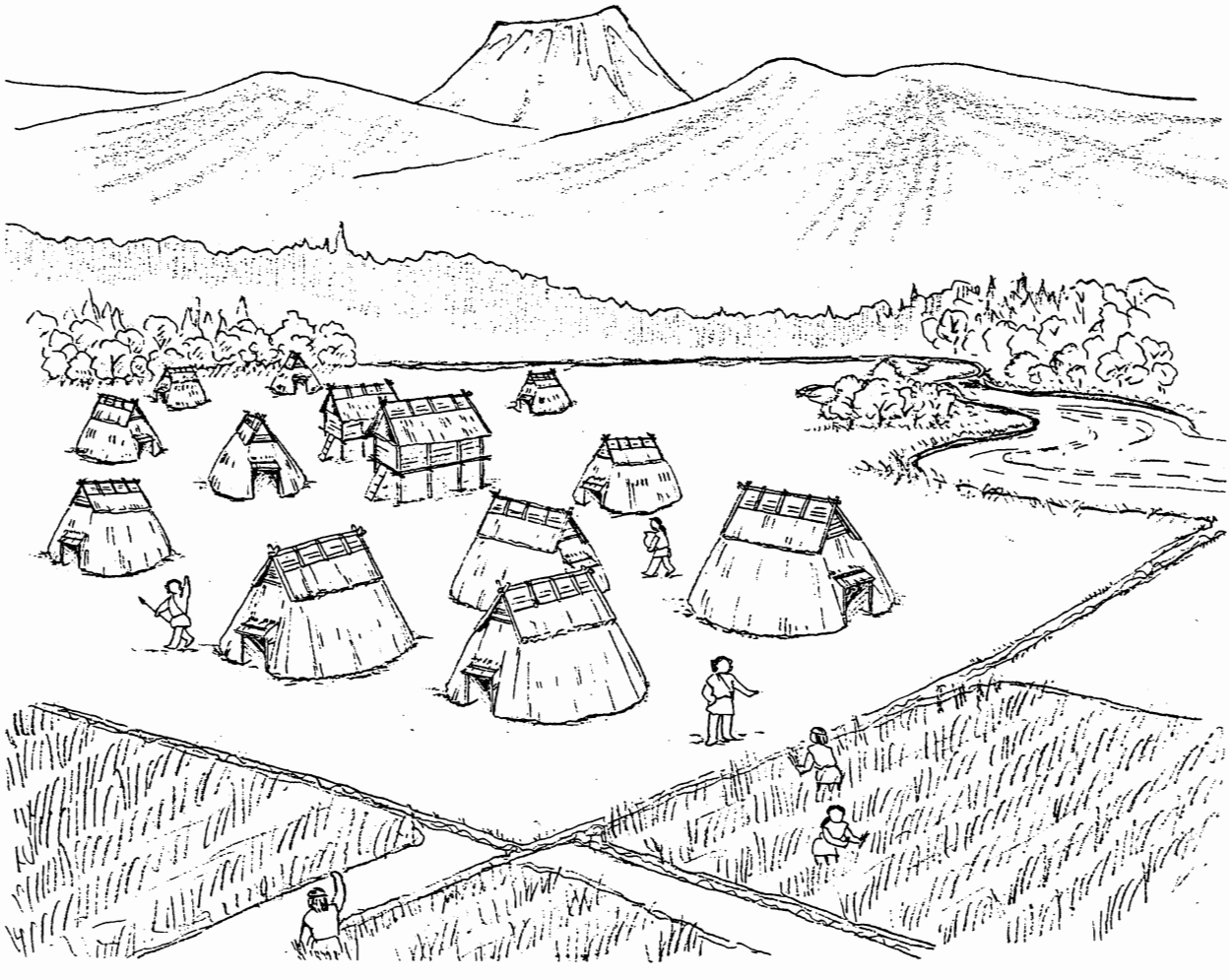
第１図　中里遺跡の位置と周辺の関連遺跡（1/50,000）

間近に富士山を望む平地の上に並び立つ竪穴住居や掘立柱建物、井戸、中央には神殿を思わせる大型の建物。そして集落の前に広がる水田。ここから発見された集落跡は、面積６万平方メートル。東京ドームが十分にはいる広いものであった。水田が拡がる第Ⅱ地点や方形周溝墓群が発見された第Ⅲ地点を加えると、周囲の面積は10万平方メートル以上。西日本の集落を思わせる景観であった。

今からおおよそ2100年前、ついに箱根の山を越えて足柄平野（南関東）に姿を現したのである。そして最初に集落を構えたのが小田原市の中里遺跡であった。まさしく南関東における弥生文化の転換期（変動期）であったといえる。

この中期中葉の「中里期」は、谷口報告の中期前半代までの様相とは大きく異なり、弥生時代を構成する文化要素から判断すると、南関東における本格的な稲作農耕社会が形成された中期後半の宮ノ台期をつなぐ時代と考えられる。

本稿では、中里遺跡の集落立地、集落規模、遺構群（居住域）の構成、墓制の内容、出土土器、石器組成などに着目して、弥生中期中葉の中里遺跡について検討することにしたい。



第２図　中里集落の復元（現地説明会資料より）

キーワード／中里を有名にしたもの

箱根の山を越えた本格的な水稲農耕文化，弥生中期中葉、中里式土器，沖積微高地，拠点集落，大形独立棟持柱建物，多数の掘立柱建物，方形周溝墓，地域間交流，外来系土器（東部瀬戸内系・東海系・北関東系・中部高地系・南東北系土器），大陸系磨製石器群など

２．調査略史

足柄平野の南東部に位置する小田原市中里遺跡は、昭和27年に武相学園の創始者である石野瑛氏により最初の発掘調査が行われた。昭和30年には明治大学の杉原荘介氏が発掘調査を行い、２基の土坑と蜜柑箱数箱分の土器を検出し、南関東における最古段階に属する弥生土器として注目された。その後、神沢勇一氏よって相模湾沿岸地域の須和田式並行型式として中里式が提唱され、中里遺跡出土土器のもつ学問的重要性がこれまでも論議されてきた。

小田原市教育委員会では、昭和50年代以降、石野・杉原両氏の発掘調査地点であった旧大同毛織小田原工場跡地を含む一帯を小田原市遺跡分布地図の№14「中里遺跡」の遺物包蔵地として指定し、南関東における弥生文化の転換期を考える遺跡として重視してきた。しかし、調査地点は発見以後、大同毛織小田原工場として稼働していたことと相まって40年以上も地中に埋もれていたのである。

それが平成３年に至って、石野・杉原両氏らの調査地点（第Ⅰ地点）周辺の再開発事業に伴って、現ロビンソン百貨店の東側で第Ⅱ地点の発掘調査が行われた。この調査では中里期段階の水田区画と考えられる畦畔の杭列や旧河道が発見され、遺物では中里式土器の出土は少なかったが農耕具や機織り具などの木製品がまとまって出土し、中里期における水稲農耕文化の確証をつかんだ。

翌４年には第Ⅰ地点南東側の旧大同毛織社員寮跡地の再開発に伴う第Ⅲ地点の発掘調査によって中里期の方形周溝墓46基が検出され、研究者の注目を集めた。当該期の方形周溝墓はすでに千葉や埼玉などで知られていたが、予想外の数の発見によって集落本体の存在が注目されることとなった。

そのチャンスは平成10年になってやってきた。石野・杉原両氏の調査地点（第Ⅰ地点）であった旧大同毛織工場跡地（現ロビンソン百貨店）約６万平方メートルの再開発に伴う発掘調査である。中里遺跡発掘調査団（団長戸田哲也／玉川文化財研究所）が編成され、延べ５年間にわたる調査の結果、3.5万平方メートル以上を発掘し、中里期に属する主な遺構だけを挙げても竪穴住居101棟、掘立柱建物72棟、井戸６基、土坑880基の密集する遺構群と、その西側から北側にかけて当該期の旧河道や溝が検出され、予想をはるかに超える集落規模と各種の遺構構成であることが判明した。

３．集落の立地

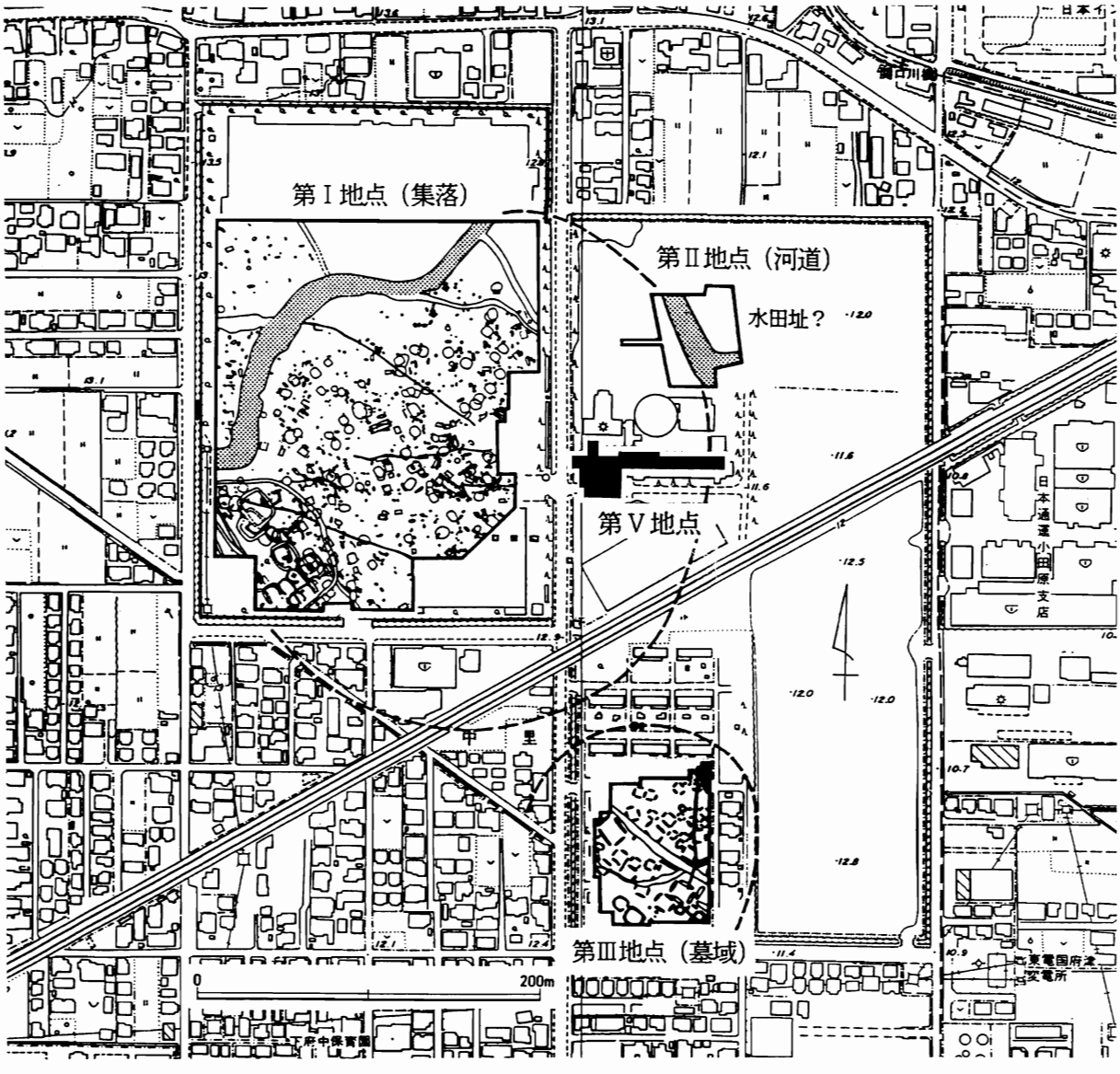
中里遺跡は足柄平野のほぼ中央を流れる酒匂川によって形成された三角州の末端付近に位置し、酒匂川とその東を流れる森戸川とに挟まれた、標高約10メートルほどの沖積微高地上に立地する。現海岸線までは直線距離で1.5キロメートルほどである。行政区分では小田原市中里に所在する。

平野部に集落を構える事例しては極めて特異な立地の集落であるが、西日本から東海地方に至るまでの前期から中期の集落は、沖積微高地に立地するのが一般的であり、むしろ本来的なあり方であったといえよう。また、その成立の背景には、東海以西の影響が受け継がれたと考えられる。

農耕出現期の集落においては、台地上にあるという常識を一度捨てる必要があろう。中里遺跡の事例を南関東や関東という枠で考えるより、この特異な点を浮き上がらせて考えるべきであろう。

4．集落の規模

中里遺跡の集落は、中期前半までの酒匂川上流域や中流域の丘陵や台地上に形成された縄文晩期以来の小規模集落（怒田上原・諏訪の前・中屋敷・堂山遺跡など）とは異なり、平野部の微高地上に立地するという特徴をもち、竪穴住居や掘立柱建物、井戸、土坑などが検出された遺構密集地区

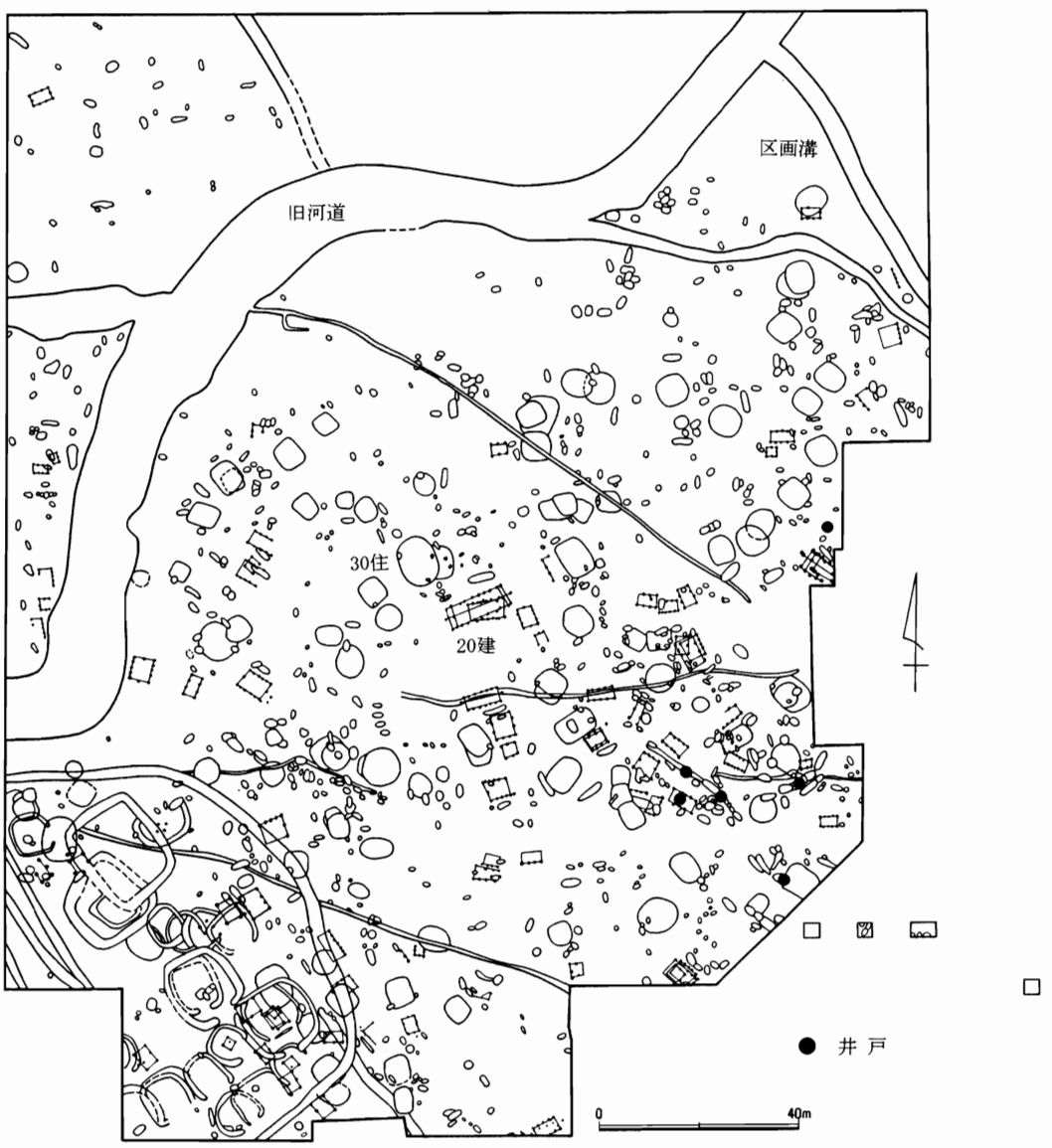


第３図　中里遺跡の各調査地点（1/40,000）

だけでも南北240m、東西260m、面積約６万平方メートル。中里遺跡は明確な環濠こそもたないが、居住域の北東側では環濠的役割を果たす溝が掘削されており、北側から西側では蛇行する旧河道がその機能を代替えしていたと考えられる。集落の全容を理解するには、南側の調査を必要とするが、溝と旧河道によって居住域が画されていたとすれば、少なく見積もっても４万平方メートル内外の規模をもつ集落であったといえよう。

居住域の東側では旧河道に隣接して畦畔の杭列が検出されている。水田こそ発見されていないが、周辺には水田が拡がっていたと考えられる。その証拠に鍬や鋤などの木製農耕具が出土している。

また、水田という生産域のほかに、居住域から独立させた墓域を隣接地に設けている。墓域は、46基の方形周溝墓からなるが、墓域は調査区外に拡がることが確実とみられ、さらに増えるものと



第４図　中里遺跡第Ｉ地点遺構配置図（1/1,500）

予測される。この時期の方形周溝墓は、すでに千葉県の常代遺跡や埼玉県の小敷田遺跡などで発見されてはいるが、南関東の玄関口にあたる足柄平野でこれほどの数の方形周溝墓が確認されたことは重要であろう。

このように環濠こそもたないが、生産域や墓域を含めると、面積は10数万平方メートルになると予測され、これほどの規模の、また整った設備をもつ農耕集落を今まで予想したであろうか。

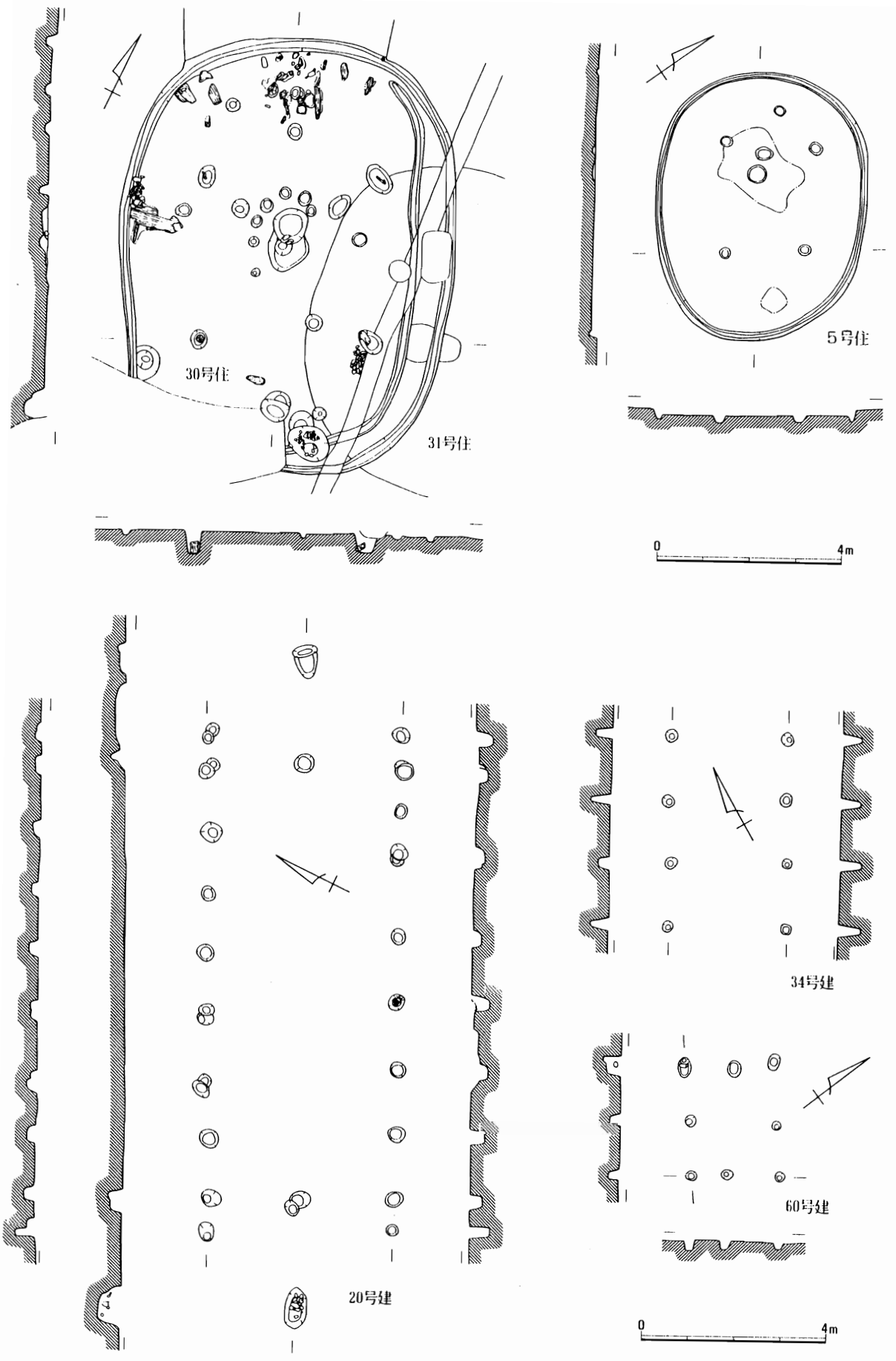
５．遺構群（居住域）の構成

中里遺跡は環濠こそもたないが、溝と旧河道が居住域を画する、環濠的な役割を果たしていたと考えられる。この範囲から101棟の竪穴住居と72棟の掘立柱建物、６基の井戸、そして880基の土坑が検出された。これらが中里を有名にした遺構群である。居住域の中心は、この第Ｉ地点の範囲を多少出る程度であるが、その規模は宮ノ台期の大規模環濠集落を凌ぐほどのものであった。

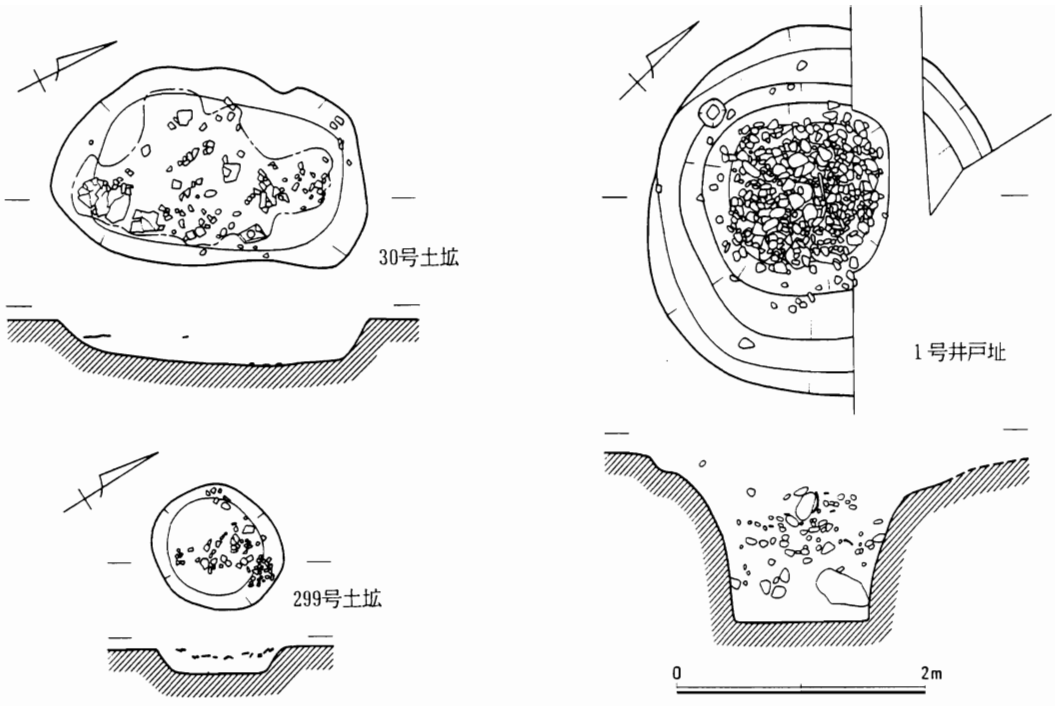
まず、竪穴住居の分布状況からみると、溝と旧河道に画された範囲内に平均的に分布している。近接するものもあるが、住居間の重複は意外と少なく、最大でも３回程度の重複であった。また、掘立柱建物との重複も少なく、両者は一定の家地空間を形成することから限られた期間での変遷と考えられる。住居群の配置については、攪乱の影響もあって視覚的な域を出ないが、サークル状に配された大小10数棟の住居群が、５ないしは６群程度集まって中里の集落が構成されていたものと考えられる。住居間の重複や近接関係から少なくとも三時期ぐらいにわたる変遷があったとすれば、各群は一時期に４、５棟の住居からなっていたと思われる。個々の住居の特徴では、８ｍを超える大形住居が全体の約１割で、５～６ｍのものが大半を占めている。大形住居は群単位に認められ、中里遺跡で最大級の30号住は居住域の中心部で検出されている。平面形は隅丸方形が主体であるが、楕円形や西日本に多い円形のものもみられ、全体的な構造は宮ノ台期のそれと近似している。

つぎに、掘立柱建物の特徴についてみると、中里遺跡では大小72棟もの建物が確認されている。その分布状況は竪穴住居と同様、居住域に平均的に分布しているが、多くは住居群に付随するかのような配置を示している。その中で居住域のほぼ中心で検出された大形の掘立柱建物は、独立した棟持柱をもつ独特な構造の建物で、大阪府池上曽根遺跡の神殿風の建物を彷彿させるものであった。最大の20号掘立柱建物は、桁行７間（10.5m）、梁行２間（4.5m）の身舎に、両妻側に廂が付き、両妻中央の外側に独立した棟持柱が配され、弥生中期のものとしては群を抜く。このような工法の建物は近畿地方では類例を増やしつつあるが、東日本ではまだ少なく、特殊な構造であることから祭儀に関わる建物と考えられる。これも外来的要素の一つである。

他に貯蔵施設や廃棄穴と考えられる800基以上もの土坑や、中心部分に限ってみられた井戸など、どれも従来の在地的思考では理解し得ない西日本的色彩の強い内容となっている。



第５図　中里遺跡第Ｉ地点　竪穴住居及び掘立柱建物（1/120）



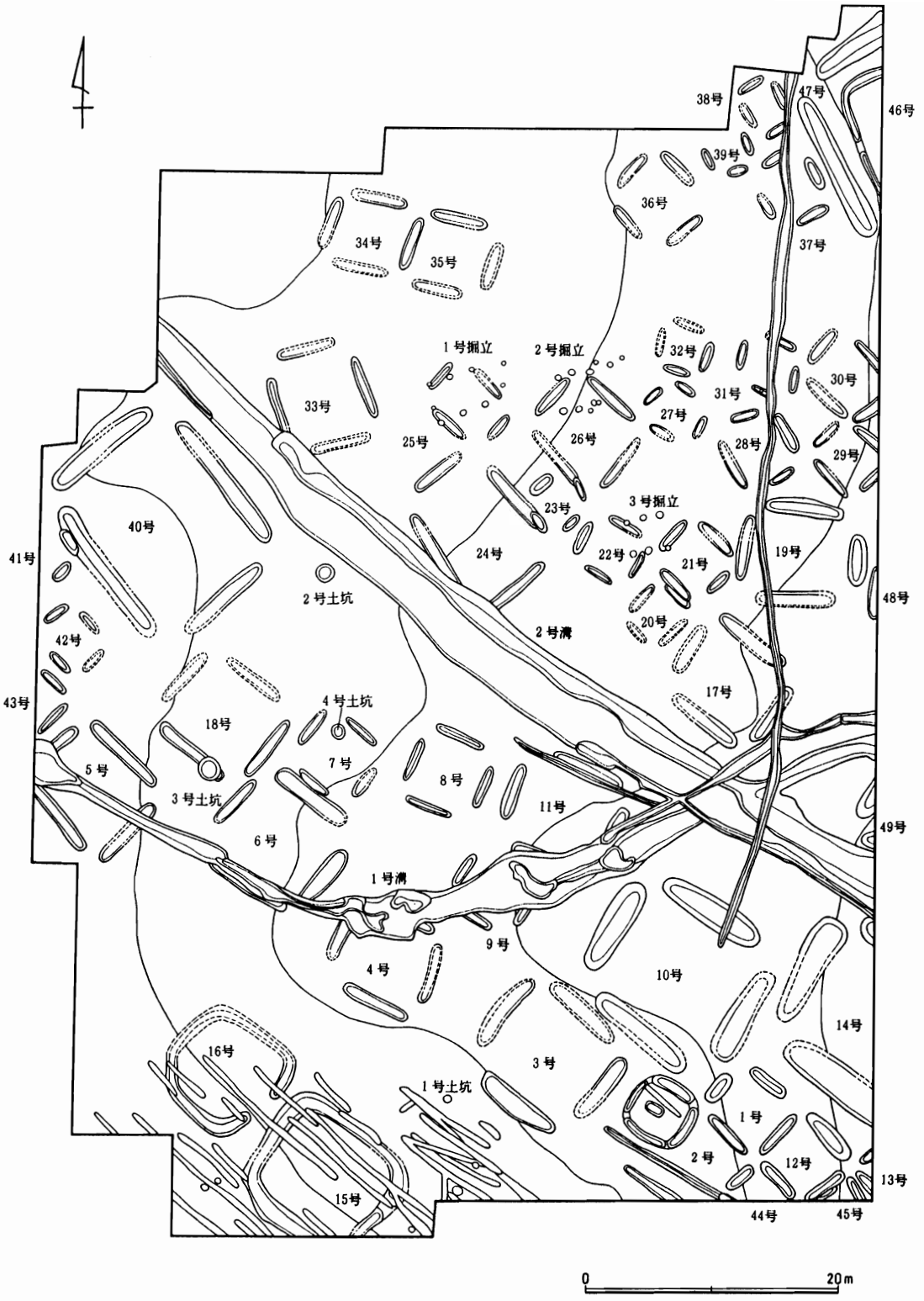
第６図　中里遺跡第Ⅰ地点　井戸及び土坑（1/60）

６．墓制の内容

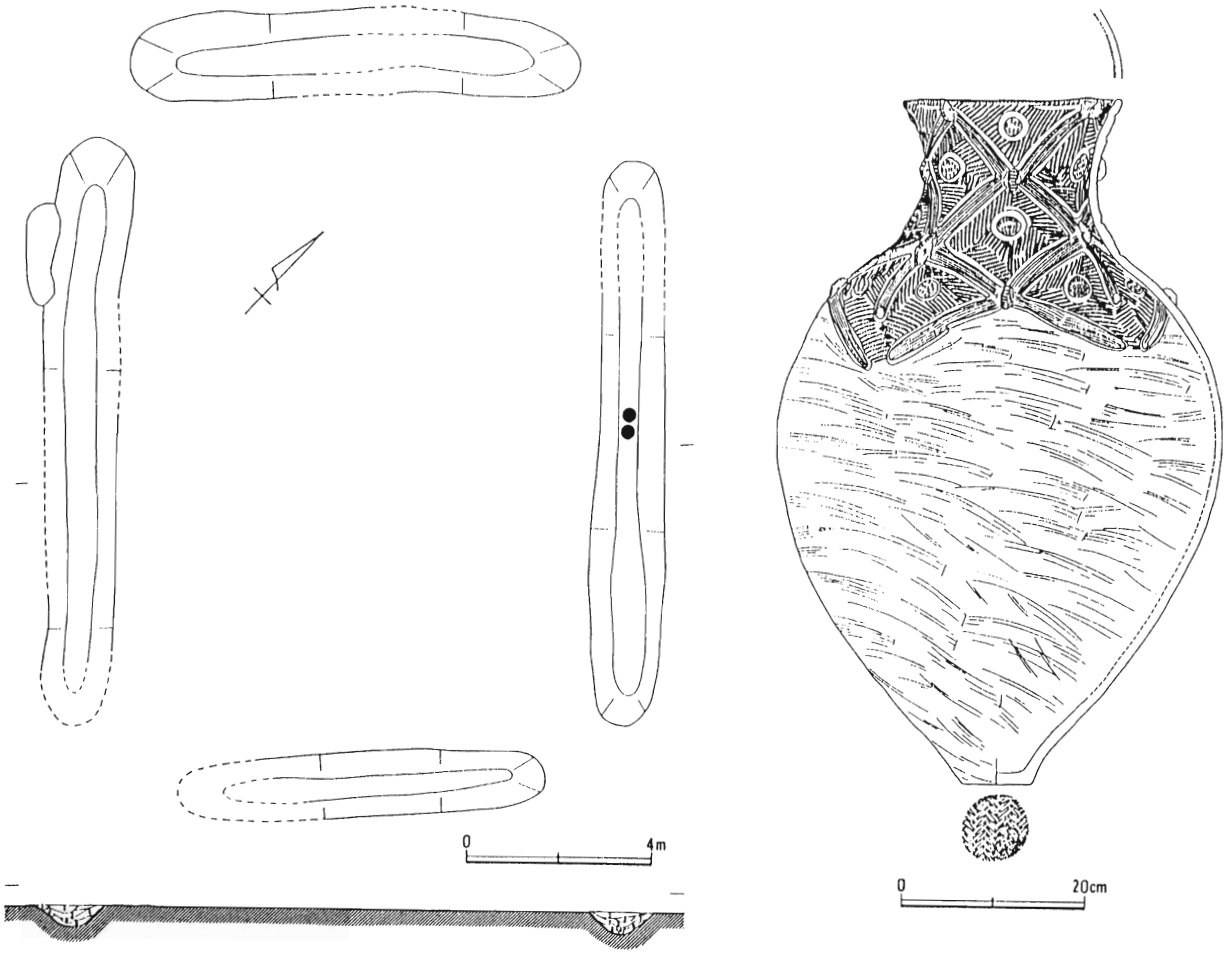
中里遺跡の墓域は、居住域の南東にあたる第Ⅲ地点で確認され、46基にものぼる方形周溝墓群が検出された。これらは千葉県や埼玉県の事例と並んで、南関東でもっとも古い方形周溝墓である。いずれも四隅に土橋部をもつ、伊勢湾沿岸地域に特有の形態であり、この時期に東海から関東までほぼ一斉に登場する。46基の方形周溝墓は、溝幅を含む長軸長でみると、４m台から17m台までと幅があるが、８m未満の小形、８m以上～12m未満の中形、そして14m以上の大形に分けられる。すでに報告で述べたことであるが、数基ずつ軸を揃えて配された小群の累積によって４つないしは５つ程度の墓域が構成され、４基ある大形の方形周溝墓は３か所分散し、その周りに中形と小形の方形周溝墓が配されている。住居と同様に遺構間の重複は少なく、長期にわたって営まれたものでないことは明らかである。また、墓域の構成過程では住居群と共通点が多い。方形周溝墓の群構成については、３基前後のまとまりを世帯共同体の累積と捉える都出比呂志氏などの見解があるが、連続配列をとる方形周溝墓は世帯単位で造営されたものと考えられる。

７．出土遺物

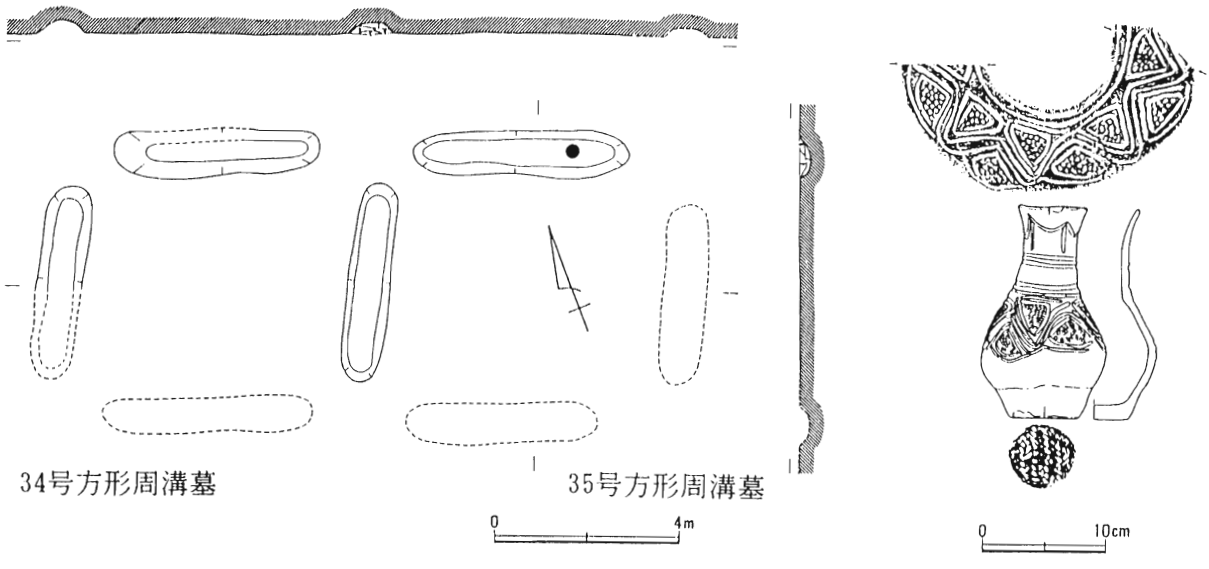
遺物は、主に竪穴住居や掘立柱建物、土坑、井戸、旧河道などから出土した。土器類、石器類、木製品、土製品、炭化米、種子類、獣骨類などである。土器類は在来の中里式土器が主体をなす。中里式に混じって出土したのが遠隔地からもたらされた外来系土器群である。とくに畿内系土器は中里を有名にした。故知は現在の兵庫県明石周辺。東部瀬戸内系土器（畿内第Ⅲ様式前半）である。



第７図　中里遺跡第Ⅲ地点遺構配置図（1/500）



40号方形周溝墓



第８図　中里遺跡第Ⅲ地点　方形周溝墓及び出土遺物（1/160，1/8）

中里遺跡における畿内系の搬入率は約３％。器種では、広口壺、直口壺、無頸壺、中甕、小甕、鉢、高坏、器台、蓋などからなるが、壺・甕類の比率が高い。近畿系土器以外では東海系土器が目立つ。尾張の貝田町系土器、三河の瓜郷系土器、遠江の嶺田系土器、駿河系土器などである。また、東海から北陸地方に分布する大地系土器が含まれる。中部高地系土器、北関東系土器、南東北の南御山２式土器などの系統を引いた土器もみられ、近畿地方のみに限られたものではなかった。

石器類では、伐採用の太型蛤刃石斧とその未製品、木材加工用の抉入柱状石斧や大小の扁平片刃石斧といった、いわゆる大陸系磨製石器群を備えている。また、粗割－打裂－敲打－研磨の工程が分かる石器工房もあり、各種の大陸系磨製石器群が集落内で生産されていた。これらの他に大形の打製石鍬や穂積具などの農具、石皿・磨石・敲石・砥石などの加工具も多量に出土した。狩猟用とみられる黒曜石製の石鏃が発見されたが数は少なかった。サヌカイト製の打製石剣は畿内産である。

木製品では装着方法が分かる石斧の柄や農耕用の鍬とその未製品、丸木弓、各種の木製容器など。紡錘車は土器からの転用品が多かった。種子類、獣骨類などの自然遺物も含まれ、鹿角は旧河道や井戸などの特定の場所で認められた。

８．おわりに

今までみてきたように最初に確認しなければならないことは、宮ノ台期以前の中里期に革新的な稲作技術とともに新来の墓制が伝えられ、それが受け入れられたことである。畿内からの移住者や東海地方西部（伊勢湾湾岸地域）との係わりが中里集落の成立に大きく関与したことは確かである。

では在地との融合がどのようになされたか。中期前半までの様相とは本質的に異なり、この中期中葉の中里集落は弥生時代を構成する文化要素から判断すれば、南関東における本格的な稲作農耕社会が形成された中期後半の宮ノ台期をつなぐ時代と考えてほかならない。

水田開発や方形周溝墓という新たな墓制、大形の掘立柱建物や井戸、多様な土坑などの施設は、単純に情報だけではなし得ない先進技術である。搬入された畿内系土器は全体の約３％であるが、個体に換算すると100に近い数である。畿内系の人々によって持ち込まれたことも事実であろう。中里集落の成り立ちを、酒匂川の上流や中流の山塊から下りてきた小集団が集まってなし得たとは到底考えられないのである。つまり、中里集落とをつなぐ集団がすでに生まれていたと考える方が説明し易い。県内でも畿内系土器を出土する中里期の遺跡がほかにも知られるようになってきた。本格的な弥生文化への傾斜は中里期まで遡る可能性が高いと考えられる。

在地との融合。間近に富士山を望む平地の上に並び立つ集落景観、神殿を思わせる大形の建物。集落の前に拡がる水田。この問題解決と、この景観を想い描くには常識を一度捨てる必要があろう。

＜引用・参考文献＞

都出比呂志 1986「墳墓」『日本考古学』4 岩波書店

呉地英夫・河合英夫 1997『神奈川県小田原市中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書－川東タウンセンターマロニエ新築工事 に伴う発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第61集 小田原市教育委員会

大島慎一 1997『小田原市地方の弥生時代研究に関する覚書』小田原市郷土文化館研究報告№33 小田原市郷土文化館

戸田哲也 1999「東日本弥生農耕成立期の集落－神奈川県中里遺跡－」『季刊 考古学』第67号 雄山閣出版

戸田哲也 1999「神奈川県中里遺跡第Ⅰ地点」『邪馬台国時代の国々』季刊考古学別冊9 雄山閣出版

戸田哲也 1999「小田原市中里遺跡」『第23回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』小田原市教育委員会

呉地英夫 1999「2. 中里遺跡第Ⅰ地点」『平成11年小田原市遺跡調査発表 発表要旨』小田原市教育委員会

河合英夫 1999「南関東弥生農耕形成期の集落－小田原市中里遺跡の調査－」『多摩考古』第29号 多摩考古学研究会

河合英夫 1999「事例報告1 小田原市中里遺跡」『平成10年度 発掘調査成果発表会公開セミナー 弥生時代の幕開け－縄文から弥生への移行期の様相を探る－発表要旨』(財)かながわ考古学財団

石川日出志 2000「中里遺跡と東日本の弥生時代」『平成12年小田原市遺跡調査発表会 中里遺跡講演会～東日本の幕開けを解明する～発表要旨』小田原市教育委員会

大島慎一 2000「かながわの弥生文化からみた中里遺跡」『平成12年小田原市遺跡調査発表会 中里遺跡講演会～東日本の幕開けを解明する～発表要旨』小田原市教育委員会

戸田哲也 2000「中里遺跡の調査」『平成12年小田原市遺跡調査発表会 中里遺跡講演会～東日本の幕開けを解明する～発表要旨』小田原市教育委員会

呉地英夫 2000「3. 中里遺跡第Ⅰ地点第2・3期調査」『平成12年小田原市遺跡調査発表会 中里遺跡講演会～東日本の幕開けを解明する～発表要旨』小田原市教育委員会

石川日出志 2001「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』第113号 駿台史学会

河合英夫 2002「2. 中里遺跡第Ⅴ地点」『平成14年小田原市遺跡調査発表会 発表要旨』小田原市教育委員会

設楽博己 2005『稲作伝来』先史日本を復元する4 岩波書店

三浦半島の弥生時代

― その発展の軌跡 ―

中村　勉

はじめに

三浦半島の地域を限定すれば三市一町と総称される範囲、つまり横須賀市・三浦市・逗子市・葉山町を対象とする。西には伊豆半島との間に相模湾が、東には房総半島との間に東京湾、そして南部には太平洋に囲まれた地形の大半は標高 20mから 30mを測る丘陵地で、南部の三浦市において海蝕台地となる。河川は北部から中央部を貫流する２級河川である平作川が最も大きな流域面積を占め、それに続いて逗子市の中央部を東西に貫流する田越川が主なものといえる。丘陵の様相は複雑で、100mを越える山として葉山町における二子山、横須賀市北部における鷹取山、同じく西部に連なる武山丘陵、さらに大楠山の山塊から派生する小高い樹枝状の小台地があり、これらの台地間には狭小な谷戸が幾重にも形成されている。南部の海蝕台地においても、標高 40mから 50mの海蝕崖に溺れ谷が深く入り組み海蝕台地を切り裂いている。このような三浦半島の地域に芽生え、根付き、発展していった弥生時代には、どのような地域的な特徴があるのかを概観していくことにする。

1. 遺跡の分布からわかること

第１図は、三浦半島の弥生時代遺跡の分布図である。この分布図から読み取れることをいくつか紹介してみよう。

半島内に分布する弥生時代の遺跡は、少なくとも６ないし７つの範囲にほぼ限定されることが伺える。地域的に概観すれば、（A）逗子市域の田越川から逗子湾周辺、（B）横須賀市西海岸の小田和湾周辺、（C）三浦市海蝕台地一帯、（D）横須賀市南部金田湾周辺、（E）横須賀市平作川周辺、（F）横須賀市東海岸鴨居周辺、という範囲に相当する。かつて岡本勇が指摘しているように、これらの地域以外に遺跡の分布を見いだすことはあまりなく、したがって地域的な偏在を示していることに特徴を見出すことができる。無論これらの遺跡分布は、同時期のものではない。次に遺跡の時期的な特徴と其の拡散について見ていくことにする。

2. 遺跡の拡大

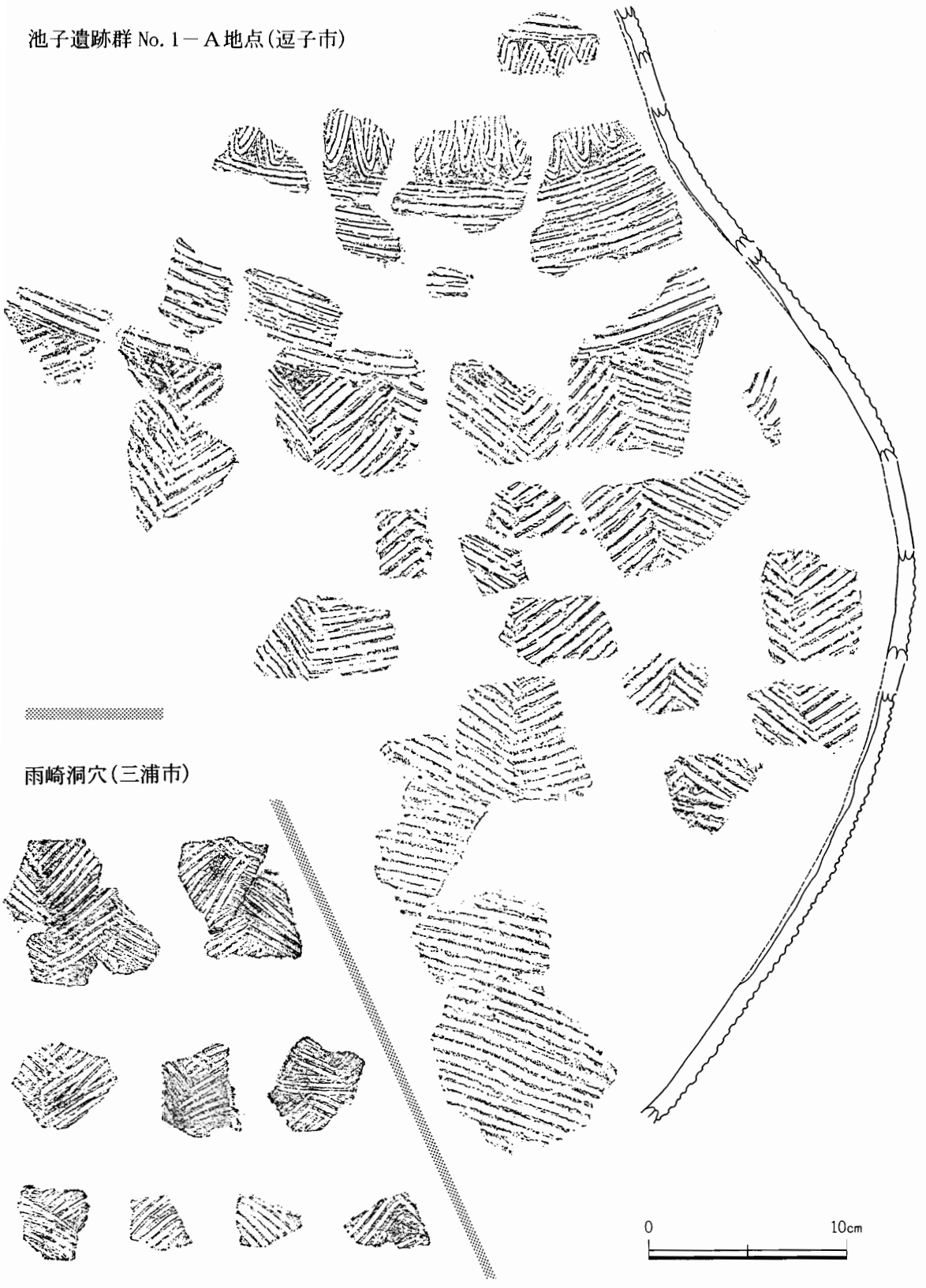
①　中期前葉から中葉の時期

この半島に弥生時代の到来を告げる弥生土器は、東海に祖型をもつ条痕文土器である。A・Fの地域にそのわずかな痕跡を見いだすことができる（第２図）。A地域においては池子遺跡群 No. 1－A地点(以下池子遺跡とよぶ)、C地域の雨崎洞穴からそれぞれわずかではあるが条痕

第１図　三浦半島の弥生時代遺跡分布図

文土器が検出されており、遺跡立地を考慮すれば海路によってもたらされたであろうことが容易に推測できる。

須和田式土器を検出した遺跡としては、Ａ地域の池子遺跡、Ｂ地域の芦名浜遺跡、Ｃ地域の赤坂遺跡と雨崎洞穴および間口東洞穴と遊ケ崎遺跡、Ｅ地域の三足谷遺跡の７箇所が知られている。条痕文土器や次の須和田式土器の時代に限って分布を鳥瞰すれば、遺跡の立地が海岸部に集中的にみられることは、三浦半島における弥生時代の伝播とその発展が海岸部を通じて形成されていったことを示唆するものがある。しかしながら広大な海蝕台地上にある赤坂遺跡や旧河道の微高地に存在する池子遺跡のあり方は、須和田式土器の使用者が単に海辺に対してのみ生業を営んでいたのではないことを暗示するものがある。須和田期の出土地が明らかに前時期の範囲を越えて半島内の各所でみられることは、次の宮ノ台式土器の時期にみられる急激な



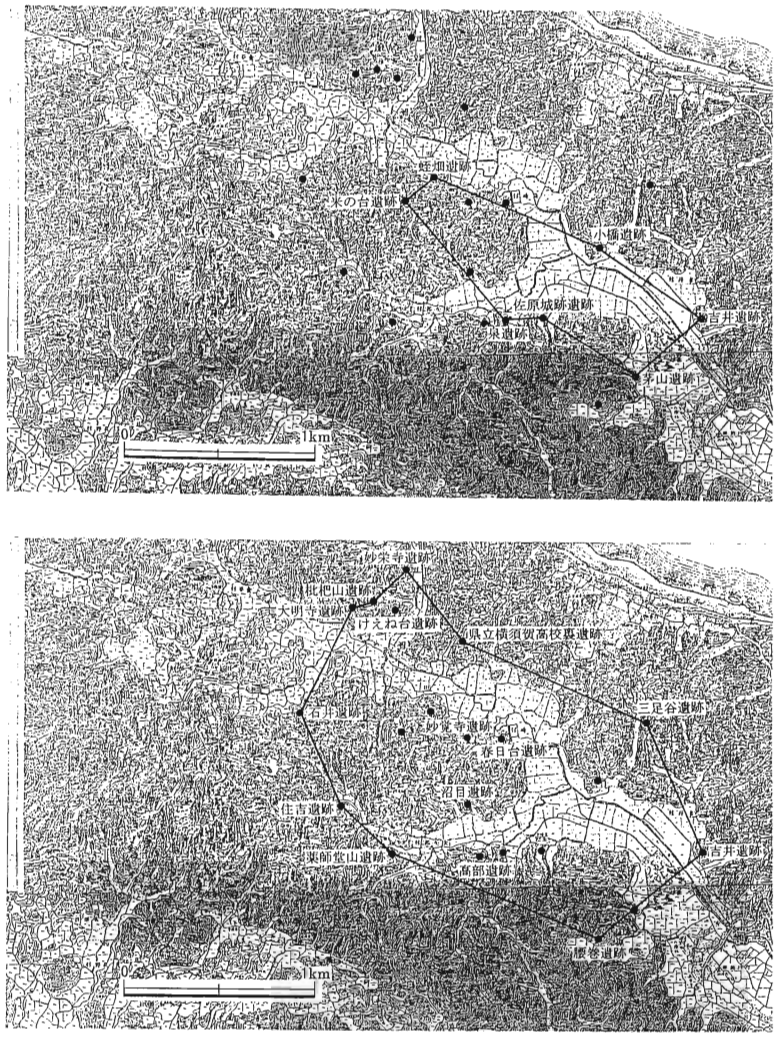
第2図　三浦半島出土の条痕文土器

遺跡増加の動因を考えるうえで、見逃すことのできない動きといえるからである。

② 中期後半の時期

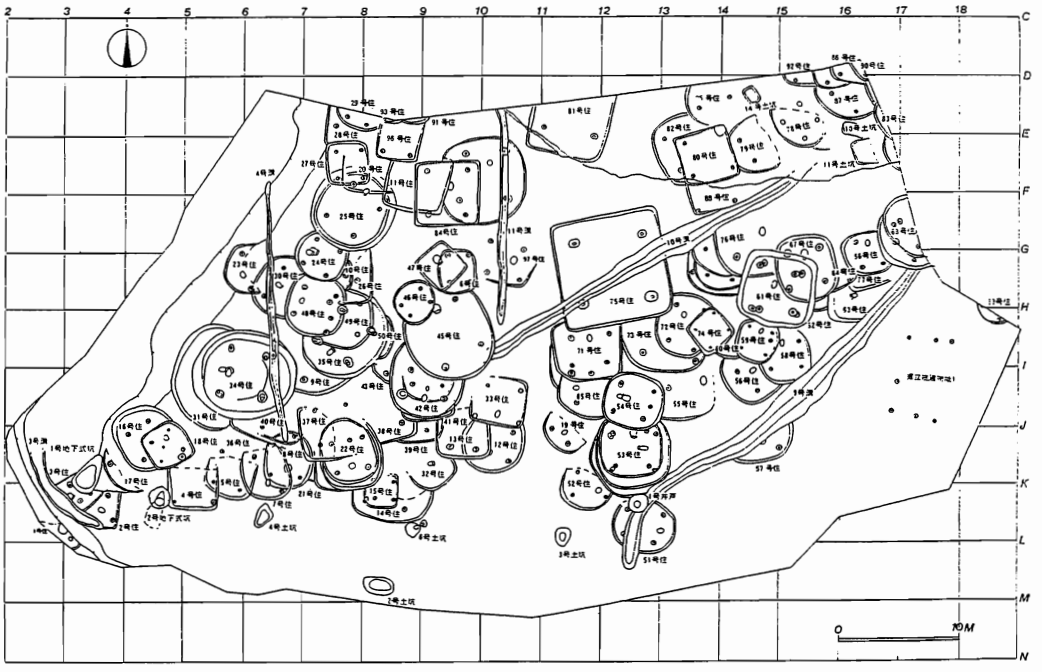
宮ノ台式土器を出土する遺跡は、半島内の小河川を眼下におさめる狭小な台地上に多くみられる。この点は、須和田期の立地と異なりをもつ。A地域では田越川流域の樹枝状に張り出した台地ごとに遺跡がみられる。このような流域沿いの台地ごとの遺跡立地は、E地域の平作川およびその支流である岩戸川と矢部川の一帯において顕著なものがある。遺跡間の距離は、300m から 400m の範囲に位置し、互いの遺跡をうかがうことの出来る範囲内にそれぞれが配置している。水系を意識したような遺跡のあり方こそ、本格的な水稲耕作を意図した宮ノ台期の特徴といえよう。E地域の泉遺跡や赤坂遺跡から出土した炭化米の存在は、そのことを裏付けるものである。遺跡はしたがって、海岸部からより内陸部に展開する。しかし、それと同じく海岸部においては海蝕洞穴を利用した遺跡も増加する。

三浦市南部に散在する海蝕洞穴遺跡の多くが宮ノ台期からのものであることは、明らかに内陸部に展開する遺跡との連動で思考すべきものといえる。池子遺跡の旧河道から出土する木製農具とともに、多くの骨角器が発見されているが、これらの形態は海蝕洞穴遺跡から出土するものと類似する。そのことは、C地域の赤坂遺跡においても指摘することができ、検出された住居内貝塚から出土する貝種と海蝕洞穴との類似性、さらには石皿と多くの叩き石の存在、さらにはイノシシやシカなどの動物遺存体の存在、また、泉遺跡から出土した大麦の存在は畑作をも生業に取り入れていたことを示しており、狩猟や漁撈さらには堅果類の栽培と畑作など多様な手段をも取り入れながら、小支谷の可耕



第3図　平作川流域の弥生時代遺跡分布図

上：中期　下：後期



第４図　逗子市地蔵山遺跡群 No. 118 遺跡遺構配置図

地を利用した水稲耕作を展開していったことを想定することができる。

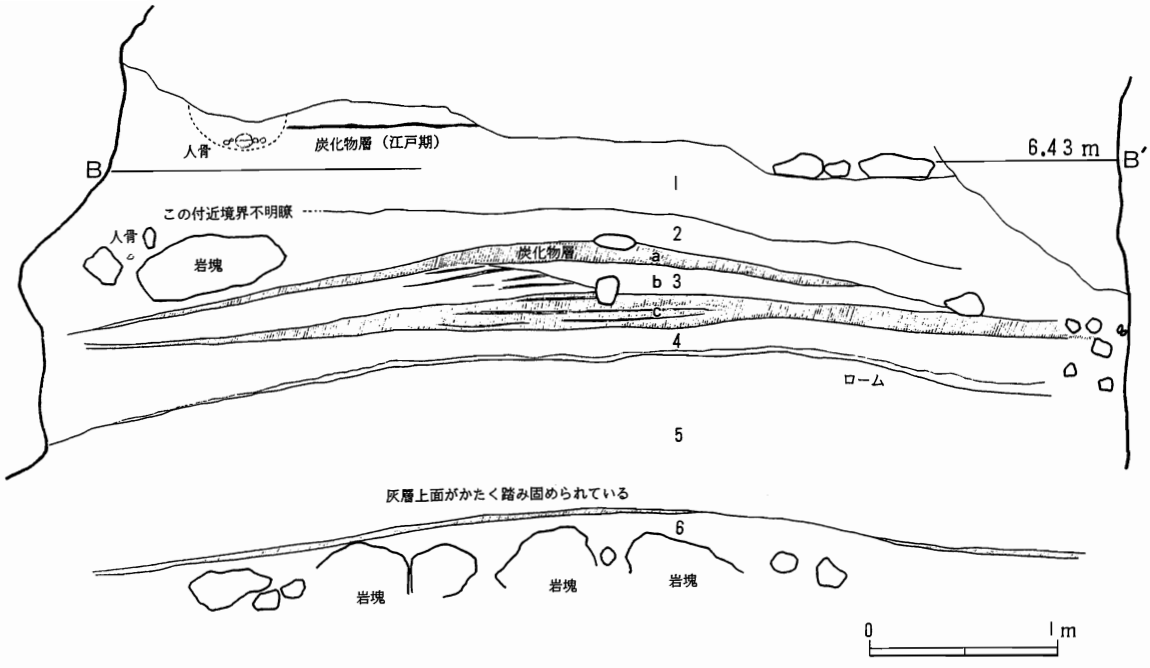
③　後期の時期

三浦半島の弥生時代遺跡の多くは、中期後半から後期にかけての継続性をもつ。それとともに、後期から古墳時代初頭にかけて継続する遺跡も多い。宮ノ台期に比較し、明らかに久ケ原式土器を出土する遺跡は増加している。

第３図はＥ地域の平作川流域における中期後半から後期にかけての、遺跡分布を示したものである。後期の遺跡数は中期後半に比べおよそ３倍に増加し、流域を広範囲に取り囲むように占地していることがわかる。このような分布パターンは田越川流域においてもみられることから、遺跡数の増加とそれにともなう地域の拡大こそが後期の時期の特徴として捉えることができる。

中期後半から後期にかけて継続する遺跡をみると、宮ノ台期の住居址は遺跡内に散在するかのように配置されているが、後期においては切り合いをもち住居址形態も複数みられる。このような例は、Ａ地域の地蔵山遺跡(第４図)やＢ地域の高原遺跡、さらにＣ地域の赤坂遺跡やＦ地域の上ノ台遺跡において顕著にみられ、後期の遺跡のもう一つの特徴といえる。

これらの特徴からみて、後期の時期は遺跡の外部における拡散と内部における継続性という矛盾した現象が表出していることに気づくのである。このような矛盾を引き起こす要因として想定できることは、中期段階で獲得した可耕地のさらなる拡大化とその維持という「土地」との強固な係わりをあげることが出来る。内陸部のこのような動きと連動し、海蝕洞穴遺跡において



第5図　三浦市大浦山洞穴断面図

も変化を認めることができる。それは、新たな洞穴の利用と洞穴内堆積層の著しい厚さである(第5図)。文化層の厚さの増大はここでの活発な人為的活動のあったことを示す物で、海辺の遺跡においても外部における拡散と内部における継続性という現象を看取できるのである。

④　弥生末から古墳時代初頭の時期

後期と末期の時期を区画するかは、きわめて複雑な問題ではある。ここでは、「今までの器種に新しい器種が加わり新しいセット関係を持つ時期」を末期と想定する。新しい器種とは、東海地方に祖型をもつ高坏や器台さらには平底坩をさす。遺跡の特徴は、後期にみられた住居址の切り合いが見られなくなり、住居址の配置も密集度が減じてくる。上ノ台遺跡や高原遺跡さらには赤坂遺跡などの遺跡において、これらの傾向を顕著に指摘することができる。そして、中期後半から後期に継続して遺跡の大半はこの時期を境に消えていく。一方、台地の遺跡の減少とは逆に海浜部に遺跡が見られるようになることも、本時期の特徴といえる。北部の平潟湾奥のなたぎり遺跡やE地域の伝福寺裏遺跡、D地域の宮ケ谷遺跡さらにF地域の小荷谷遺跡がそれで、なたぎり遺跡からは外来系の土器が多くみられる。しかしながら、これらの遺跡の性格については不明な点が多い。海浜部の遺跡の出現に対し、海蝕洞穴遺跡での堆積層はほとんど見られなくなる。つまり、台地の遺跡同様、継続性に変化が生じたものといえる。

この時期を境に、弥生時代的な遺跡立地に大きな変化が生じたことは確かなことといえる。この変化の要因がどのようなものであるのかが、今後の大きな課題といる。

3. 流域にみる集落形成

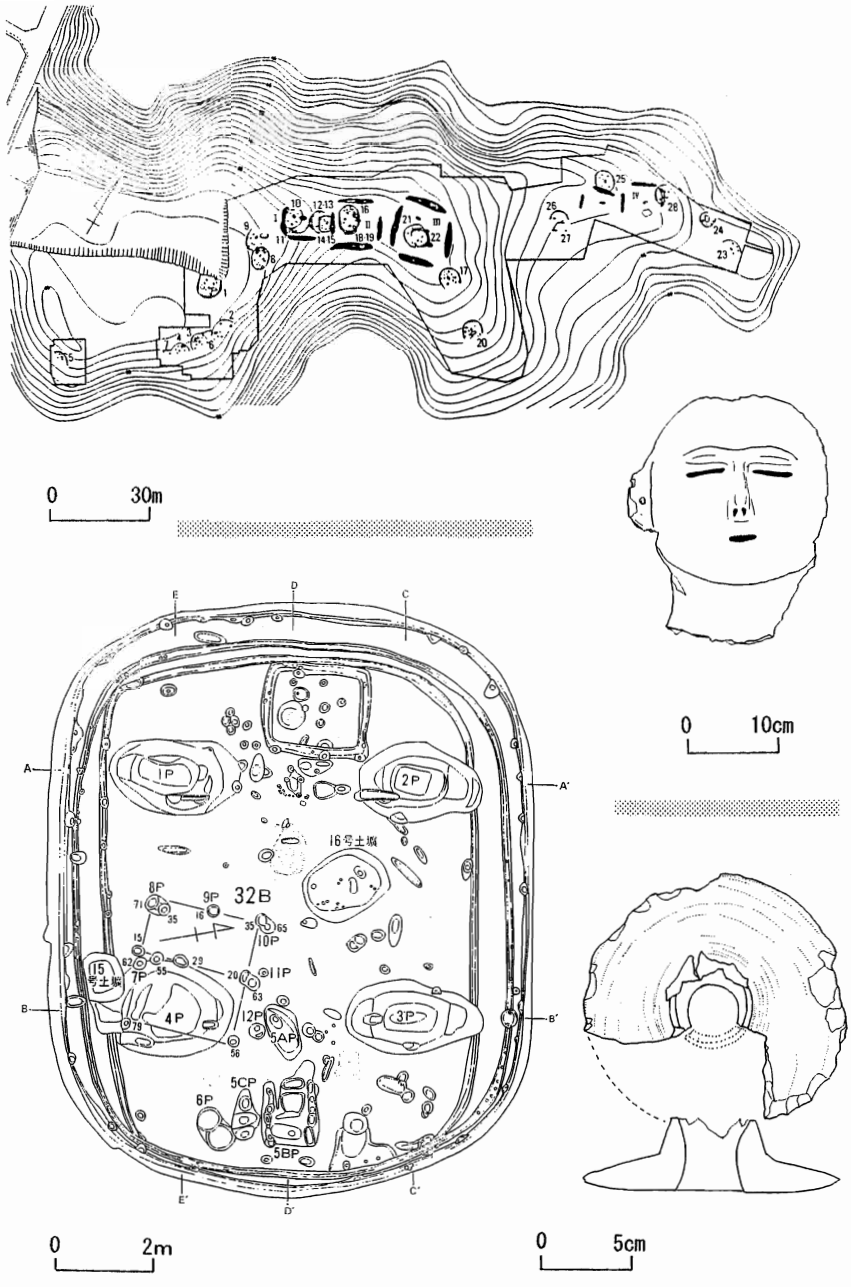
三浦半島の弥生遺跡には、特徴ある地域的な遺跡分布を観察できる場所が２箇所ある。それはＡ地域の田越川流域沿いの遺跡分布であり、もう一つはＥ地域の平作川本流および支流の地域である。

田越川流域における最初の弥生時代遺跡は池子遺跡であり、さらに宮ノ台期において旧河道からは大量の木器や漁撈具を出土してもいる。しかしながら今のところ、集落位置においては不明である。この地点から南東に約 500mの位置に、持田遺跡がある。この遺跡は宮ノ台期においてもⅡ期にはすでに集落の形成が始まっており、この二つの遺跡は田越川を挟んで距離的にも時期的にも近しい関係を持っていたであろうことが推測できる。

持田遺跡と約 300m谷を隔てた西の狭小な台地には、後期の地蔵山遺跡が、さらに東の谷を隔てた台地には台山稲荷下遺跡や後期から古墳時代初頭にかけての沼間台遺跡がある。とりわけ、地蔵山遺跡では 100 軒近くの後期の住居址が検出され、その数は調査された持田遺跡を凌駕してもいるが、集落の継続は後期後半を境に消滅していく。また、田越川を挟んだ北部の台地には海宝院裏遺跡や廻倉谷遺跡など、いずれも後期の時期に形成される遺跡が巡っている。これらの遺跡群と持田・池子遺跡とはある時期同時に存在したことが推測でき、この点から、持田遺跡と池子遺跡を中心にこれらの後期の遺跡が出現したことが想定できる。このように、核となる遺跡を地域において見出すことのできる例として、平作川流域のＥ地域がある。

平作川本流域の蛭畑・米ノ台遺跡、支流域の佐原城跡・泉遺跡は、田越川水系の遺跡分布と同様、二つの小台地に対峙するように遺跡があり、その後に各遺跡周囲に後期の遺跡が分布するようになる。このような遺跡は地域の先駆け的な遺跡であるばかりでなく、その継続性から明らかに地域の核的な遺跡と呼ぶことができる。これを裏付けるような泉遺跡における巨大住居址、蛭畑遺跡の 20mを超える方形周溝墓の存在は、相互依存的な集団的関係にあった流域の小集落における集団関係を結合するモニュメントとしての意義をもつ構造物と考えることも出来る(第６図)。

三浦半島における集落の発生と展開は、概ねこのような経過を経て推移していくかのようである。それは、丘陵地という地形的な制約の中で集落を維持し発展するために、台地単位で幾つもの小集落を生み出し、互いに連携しあいながら一つの集団を形成するものである。このような集団関係を形成していく背景には、眼下の沖積地における水稲耕作を目指したものであることは、池子遺跡の旧河道から出土した木製農具や泉遺跡 32C 住居址出土の炭化米の存在を通じうかがう事ができる。しかし、このような集団関係とは異なる集落の展開が、Ｃ地域の赤坂遺跡やＢ地域の高原遺跡において見ることができる。次に、半島南部の集団関係についてみていこう。



第6図　横須賀市蛭畑遺跡・泉遺跡

上：蛭畑遺跡遺構配置図・人面土器

下：泉遺跡巨大住居址・環状石器

4. 赤坂遺跡と半島南部の集落

赤坂遺跡は7万㎡の規模をもつ、おそらく半島最大の集落遺跡である。標高40～50mの台地からは、はるかに伊豆半島や大島を眺望し、周囲の海蝕崖は天然の擁壁となっている。深い海蝕崖がつくる谷戸には、地下水が湧きその水路には鮎やウナギ鮒などの淡水魚が昭和30年代までみられたという。赤坂遺跡は、集落としての起源を須和田期にもつと推測することができ

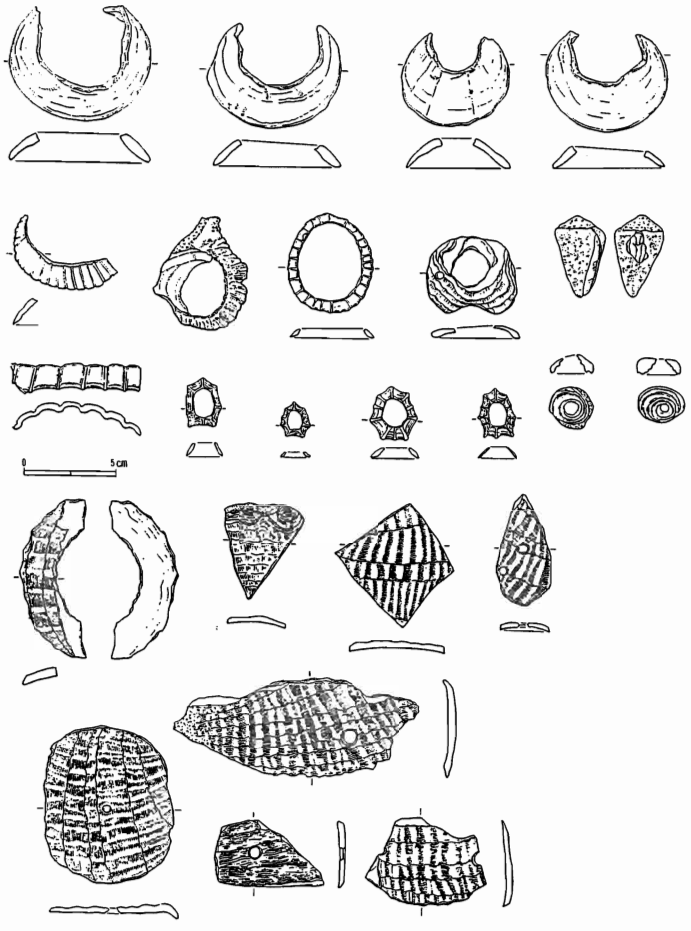
る。さらに宮ノ台期においてもⅠ期の時期からの継続を認めることができ、さらに後期において集落の規模を拡大している。三浦市南部に広がる海蝕台地という広大な平坦面は、他の地域とは異なる水平的な集落の拡大を容易に展開できた結果といえよう。宮ノ台期の集落遺跡を周辺で見ていくと、遺跡の南西約1500mに海に突き出た岬の小台地に藤ケ崎遺跡があるにすぎず、同時期の遺跡としては間口洞穴・雨崎洞穴・大浦山洞穴・海外洞穴などの海蝕洞穴遺跡を加えるのみである。しかし、後期にいたると半径２ｋｍの位置に才京込・釜田・内込・がんだ畑・出口南・神田・黒崎遺跡など7箇所ほどの遺跡が形成されるようになり、海蝕洞穴遺跡も毘沙門洞穴群・浜ノ原洞穴・向ケ崎洞穴など新たな洞穴遺跡が出現してくる。

赤坂遺跡では現在まで遺跡の約３割の調査が実施され、180 軒ほどの住居址を確認されており、その8割が後期に属するものである。注目すべきは、長軸10mを超える巨大住居址が宮ノ台期という幅のなかで３軒ないし４軒が建造され、泉遺跡における長軸12mをはるかに超えた長軸15m規模の住居址もある。さらに、有角石器や鉄剣型石器などの希少遺物をはじめ、工具としての大陸系磨製石器の量と質は他の遺跡を圧倒するものがある。後期においても巨大住居が存続し、銅鏃・銅環・有鈎銅釧・銅釧の青銅製品、小型の鉄剣・鉄斧や鉄製釣針など各種の鉄製品の出土とガラス小玉の存在は、宮ノ台期以降の隆盛を誇る物がある。巨大住居の建造が、先に示したように集団の結合を表現するモニュメントと考えたとき、赤坂遺跡と他の集団との関係が問題となる。周囲に宮ノ台期の遺跡を見出すことの出来ないとしたら、1 集団の力でなしえたものであろうか。そうであるのなら、赤坂遺跡の集落はＡ・Ｅ地域の流域にみる集団関係を一つの集落に内包したものと想定することになる。このように、三浦半島における弥生時代の集落形成には、谷戸単位の相互依存的な小集落を集団化したあり方と、集落内に小集団を内包し集団を形成する二つの形態をみることが出来るのである。

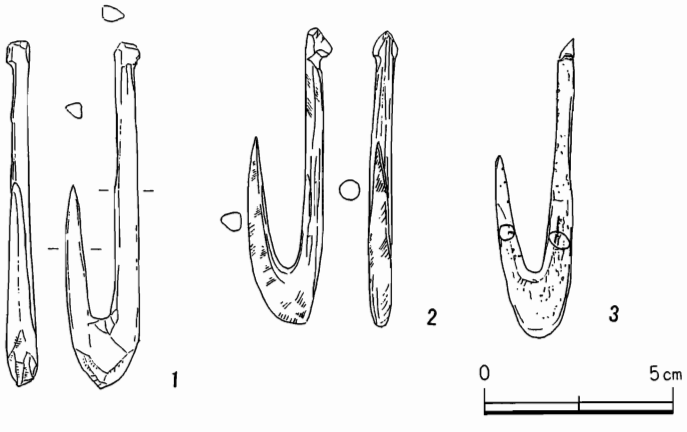
さらに、中期および後期の多彩な遺物は、その多くが搬入品でありいずれも希少遺物であることは、農耕や漁撈に携わることで賄えるものではない。このような富の集中がおこなわれた背景はどこにあるのであろう。

5. 赤坂遺跡における富の原泉を考える

三浦半島における生業の一つである漁撈の実態は、従来海蝕洞穴遺跡の遺物を中心に考究されてきた。しかし、最近の台地上の遺跡における詳細な調査の結果、量的には少ないものの漁撈関連の遺物が発見されるようになった。赤坂遺跡においては宮ノ台期の住居址よりヤスや住居内貝塚が発見されており、後期の住居址より鉄製釣針も発見されている。また、後期の遺物包含層から土錘なども発見され、池子遺跡の宮ノ台期の旧河道からは、海蝕洞穴遺跡で見られるような骨角器の釣針・銛・ヤスなどが発見されてもいる。また、動物遺存体により多くの魚種や貝種が判明し、その形態や種が海蝕洞穴遺跡のものと類似することが指摘されている。



第７図　三浦市大浦山洞穴出土貝製品



第８図　弥生時代の釣針　　１：白浜遺跡（和歌山県）
２：猿島洞穴（横須賀市）　３：登呂遺跡（静岡県）

第１表　三浦市大浦山洞穴出土のアワビ

層位	時　期	個　数
1	平安～江戸時代	1
2	奈良時代	1
3	古墳後期～奈良時代	28
4	古墳時代中期	4
5	弥生後期～古墳前期	73
6	弥生中期～弥生後期	114
7	弥生時代中期	21
	合　計	242

これらのことから、半島においては漁撈活動が生業として高い比重をもっていたことが理解されるのである。

それでは三浦半島の弥生時代を特徴付ける、海蝕洞穴遺跡の意義はどこにあるのだろうか。洞穴内には炭・灰・砂・破砕貝が縞目のように堆積した特徴ある堆積層があり、さらに大形のアワビ・サザエなどが堆積層の脇にブロックのように廃棄されている（第５図）。このような層の厚さは後期には最大１ｍを超えるものがあり、この時期における洞穴利用の頻度の高さを示している。洞穴内にみられる大型アワビの殻は、いずれも貝に付着する巻貝などを除去した跡が認められ、単なる身を取り出しての廃棄物ではない。これらの大形アワビの身は食すると同時に干しアワビとして加工されたと推測

され、貝殻による貝輪・たれ飾り・貝鏃さらには刀子柄の螺鈿などの製品が発見されており、洞穴内より出土するベンケイガイの貝輪とともに交易財として製作されたものと考えられる。このように海蝕洞穴遺跡にみる貝製品のあり方は、交易という視点を与えてくれる。広範な文物の流れは回転離頭銛や釣針、また、アワビ起こしや土錘などの漁具の形態にも影響し、半島における文物の流れが南北の海路を通じ現れていることもその背景にある(第1表、第7・8図)。

海蝕洞穴遺跡が交易に処する交換財を製造する場でもあったと想定すれば、赤坂遺跡でみられる多くの搬入品は、交易の結果とみなしえるものである。このような財の集中を保持できた背景には、単に周囲の谷戸田を開墾していたのみではなく海蝕洞穴遺跡における交換財を管理下に収めていた結果と考えることも出来る。つまり、赤坂遺跡の生業には交易という市場的な機能も加えることができるのである。このような文物の流れと直結するような遺跡として、上ノ台遺跡や高原遺跡を加えることもできる。

三浦半島の弥生時代の集落は、流域と海岸部という二つの地形的な特性を生かし、時代を生き抜いてきたものといえる。

6. まとめ

三浦半島の弥生時代研究は、10年前にくらべ格段の進展をとげている。そのきっかけは、池子遺跡群の調査に負うところが大である。この調査により、当地における弥生時代の上限が中期前葉に位置されるようになり、旧河道における多くの多様な遺物の存在とりわけ木器類や骨角器などによって、宮ノ台期における生業の実態が生き生きと認識されるようになったからである。

この池子遺跡群の成果をもとに、従来からの課題であった海蝕洞穴遺跡と集落との関係が深化した。つまり、この2つの遺跡を切り離して考えることはできないということである。さらに、高原遺跡の調査はこの時期における内在的発展というだけでは、この遺跡のあり方を説明出来ないという問題提起が示された。このような衝撃的な内容をもつ遺跡を、従来の研究とどう関連させ三浦半島の弥生時代を考えていくかというテーマに沿って、論を展開してみた。空論と仮説に終始してしまったが、今後も三浦半島の弥生時代もけっして孤立した物ではなく、他地域と在地との関連のなかで生成・発展していたことを今後とも跡づけていきたいと考えている。

＜引用・参考文献＞

岡本　勇（他）　1975　「持田遺跡発掘調査報告」『逗子市文化財調査報告書』第6集　逗子市教育委員会

岡本　勇（他）　1981　『鴨居上の台遺跡』横須賀市文化財調査報告書8　横須賀市教育委員会

淺川利一・河合英夫　1987　「横須賀市ひる畑遺跡の調査」『第 11 回神奈川県遺跡調査・研究発表会要旨』　神奈川県考古学会

神澤勇一　1988　「三浦半島の弥生時代漁具」『季刊考古学』第 25 号　雄山閣

岡本　勇・中村　勉　1989　「佐原泉遺跡」　泉遺跡調査団

岡本　勇（他）　1990　『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』　横須賀考古学会

剣持輝久　1993　「三浦半島の漁労史」『逗子市文化財調査報告書』第 15 集　逗子市教育委員会

剣持輝久　1996　「三浦半島南部の海蝕洞穴と周辺の遺跡」『考古論叢　神奈河』5　神奈川県考古学会

久保貞子　1996　「伊勢湾周辺における弥生時代の鹿角製固定銛頭について」『物質文化』60　物質文化研究会

中村　勉　1997　「アワビの考古学」『横須賀考古学会研究紀要』1　横須賀考古学会

川上久夫（他）　1997　『間口東洞穴遺跡』　松輪間口東海蝕洞穴遺跡調査団

横山太郎（他）　1997　「三足谷遺跡」『吉井・池田地区遺跡群Ⅰ』　横須賀市吉井･池田地区埋蔵文化財発掘調査団

田村良照（他）1998　「逗子市台山稲荷下遺跡（No. 31）」『横須賀考古学会年報』33　横須賀考古学会

山本暉久（他）　1999　『池子遺跡群総集編』　かながわ考古学財団

土屋浩美　2000　「逗子市地蔵山遺跡群」『第 24 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』神奈川考古学会

中村　勉　2001　「銅環とよばれる青銅器について」『貝塚』56　物質文化研究会

中村　勉　2002　「三浦半島の弥生時代研究―海蝕洞穴遺跡と集落遺跡―」『横須賀考古学会年報』37　横須賀考古学会

浜野浩美（他）2002　「沼間台遺跡（No. 33）－沼間 1-202-25 地点」『神奈川県逗子市埋蔵文化財調査報告書』2　逗子市教育委員会

横山太郎（他）　2003　「高原遺跡」『佐島の丘遺跡発掘調査報告書』　佐島の丘遺跡埋蔵文化財発掘調査団

中村　勉　2007　「三浦半島に於ける弥生時代集落のモデル」『市史研究横須賀』6　横須賀市

弥生文化のなかの縄文系石器の流通基盤

杉山 浩平

ねらいと結論

本発表は、神奈川およびその近隣地域を対象として、弥生時代の石器およびその素材の流通について、弥生時代の石器の流通構造を支えた縄文時代以来の地域間構造に関するものである。本発表で中心となるのは、大陸系磨製石器の流通と縄文系石器の流通、折衷系石器の流通構造をそれぞれ読み解き、弥生文化の石器流通の基幹構造を明らかにすることである。山内清男や佐原眞が指摘した弥生文化を構成する3要素について、石器についてもそれぞれ当てはめることが出来る（山内1939、佐原1975）。つまり、①縄文時代から伝統的にそのまま受け継いだ要素。②大陸（朝鮮半島・中国大陸）から取り入れた要素、③縄文文化から続く要素が変容した形で弥生時代に受け継がれた要素である。それぞれに該当する石器を「**縄文系石器**」・「**大陸系磨製石器**」・「**折衷系石器**」と呼ぶこととする（表1）。

結論を先に述べるならば、神奈川を含めた関東地方の弥生時代における石器の流通は、縄文時代の石器の流通構造に新たな石器器種・石器石材が乗ずる形で行われていたと言える。縄文時代から弥生時代へと石器器種が大きく変化し、生業スタイルにも変化が見られるが、縄文文化の物資の交換・流通を基盤とした地域社会の結合が大きな影響を残していたということである。

それでは、その縄文時代以来の石器・石材の流通構造をみていくことにしよう。

1　黒曜石の一元的流通構造の解体（縄文後期から）

縄文時代の石器の流通構造が、現段階の研究をもって明らかにされているとは言い難い。北陸地方を主な産地とする翡翠大珠や信州諏訪地域や伊豆諸島の神津島で産出する黒曜石など、産地が限定できる文物については、研究が進展している（藁科・東村 1983など多数）。一方で、在地石材を用いた石器生産とその流通は、その実態がつかみ切れていない。例えば、神奈川県山北町の所在する尾崎遺跡（岡本1977）では、緑色凝灰岩を用いた磨製石斧が集中的に生産されていたことで有名であるが、そこで生産された石器の分布や流通形態が十分に検討されているとは言えない。しかし、縄文時代には、すでに遠隔地（北陸や信州など）・近隣地（尾崎遺跡など）の両地域からそれぞれ必要な物資を入手する構造が成り立っていたことは明らかである。しかし、縄文時代後期になると、遠隔地からの石材入手の構造が崩壊を始めている。

それは、縄文時代にもっとも使用される石材である黒曜石の流通構造に大きな変化が現れるのである。近年の理化学的な黒曜石の産地推定分析の成果により、旧石器時代以来、黒曜石の流通は幾度か

の転換期を迎えていることが明らかとなった。その一つが縄文時代中期末における神津島産黒曜石の衰退と信州系黒曜石の利用の開始である（鈴木 1975、田上 2000、池谷 2003）。縄文時代中期前葉から関東・東海地方で出土する黒曜石の産地は、主として神津島産であった。伊豆半島南部の見高段間遺跡を流通の拠点とする黒曜石の流通構造が広く網羅していた（池谷 2005）。しかし、中期末から後期になると、諏訪地域を中心とする信州系黒曜石が関東地方にも広く流通するようになり、石材の流通構造に大きな変化が見られる（池谷 2006）。そして、その信州系黒曜石の産地の一つである和田鷹山遺跡群星糞峠では、地表面下の採掘活動を行ってまで石材の獲得を行っている（安蒜・島田 2001）。関東・東海地方で消費される黒曜石の産地が神津島から信州へと転換したことは、確かに大きな変化である。しかし、ここで注目しておくべきことは、縄文時代中期末から後期以降、石鏃や石錐などの小形打製石器に在地石材の利用が活発になったことである。例えば、神奈川では箱根産ガラス質安山岩、箱根産・天城産黒曜石の利用であり（杉山・池谷 2006）、千葉房総半島の中部南部では新たにチャートの利用が始まっている（西野 2007）（第 1 図）。それらの様相は、あたかも神津島産黒曜石の受給関係を基盤に結合していた縄文社会が、その根幹を失ったがために、新たな社会的結合を求めて在地石材を利用した石器素材の流通を始めたかに見える。

また、この時期は、石器の製作技術において押圧剥離技術の欠落・石匙やつまみ付きの石錐の消失など黒曜石製石器の器種組成に変化がみられ、「縄文的石器製作体系の解体」（池谷 2007）が始まった時期でもある。箱根産・天城産の黒曜石の使用比率は、縄文時代中期までに比べ増えているが、広域な流通が確認されないことから、それらの石材は在地石材の利用というコンテクストの中で理解されるべきである。こうした石材利用の傾向は弥生時代中期前葉まで継続している。

2　山の黒曜石から海の黒曜石へ（弥生時代中期中葉）

縄文時代後期から再び始まる信州系黒曜石の流通は、信州を中心に太平洋側に広く流通している。管見の限りでは、愛知県一宮市馬見塚遺跡（縄文時代晩期）、同市八王子遺跡（弥生時代中期）に至るまで原石が流通している（筆者実見）。このような広く流通した信州系黒曜石も弥生時代中期中葉に大きな変化を遂げる。それは、まさに神奈川県小田原市中里遺跡が大きく展開する時期と重なる。弥生時代中期中葉の駿河湾沿岸から相模湾・東京湾沿岸の遺跡で出土する黒曜石は、神津島産黒曜石へと移り変わり、こぶし大の円礫ないしは石核が流通する。それらの黒曜石の流通には、伊豆諸島の三宅島大里遺跡の集団が多く関与したと考えられる（杉山・池谷 2007）。

弥生時代中期中葉は、中里遺跡における近畿・摂津地方の弥生土器の出土のように、東日本各地で様々な文物の流通・ヒトの交流が確認される時期でもある。その背景には、滋賀県赤江浜遺跡（中期前葉）や静岡県角江遺跡（中期中葉）で確認される準構造船の出現という航海技術の発展が背景にあったと考えられる（第 2 図）。つまり、新たな技術を要して、縄文時代以来の石器資源を獲得しに航

海に出る姿が見て取れる。時には黒潮を渡る危険な航海を経て、各集落に持ち込まれた黒曜石は、どのように用いられたのか。縄文時代後期以降、黒曜石を用いて製作される石器器種は少なくなり、弥生時代中期中葉では、石鏃と剥片の刃部にリタッチを施す剥片石器（以降、剥片刃器と呼ぶ）のみである。関東地方で出土する神津島産黒曜石の剥片刃器の特徴は、搬入した円礫の自然面を連続的に直接打撃して、横長剥片を使用する点である。縦長剥片獲得を目的とした剥片剥離は行われていない。むしろその技術が失われたために、いわば場当たり的な自然面の直接打撃で偶発的に得られた横長剥片が刃器として用いられたと考えられる。この点などは「黒曜石の縄文的石器製作体系」の終着点の様相を呈している。そして、それら剥片刃器は、動物解体やその後の獣皮加工などに用いられたことが筆者の石器の使用痕観察（千葉県君津市常代遺跡の資料を対象とした）から判明している。

3　大陸系石器・折衷系石器の流通（弥生時代中期中葉から後葉）

黒曜石の流通が大きく転換した弥生時代中期中葉には、折衷系石器や大陸系磨製石器が搬入・流通する。

代表的な折衷系石器として、二上山サヌカイト製の打製短剣がある。この石器は、低地において水田稲作を先進的に行った小田原市中里遺跡や埼玉県行田市池上遺跡から出土している（戸田 1999、杉山・藁科 投稿中）。関東地方の水田稲作の開始には、近畿地方・東海地方の集団が関与していることを石器の研究からも指摘することができる。

大陸系磨製石器は、関東地方へ伝播した時期には磨製石斧（太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・ノミ形石斧・柱状片刃石斧）と磨製武器（石剣・石鏃）のみであった。特に長野盆地で製作された磨製石斧・磨製石器（石川 1994、安藤 1997、馬場 2001、2007、以降、本稿では緑色岩製磨製石器と呼ぶ）は、中期中葉から関東地方で広く流通する（第３図）。埼玉県行田市池上遺跡（太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧）・神奈川県厚木市子ノ神遺跡（太形蛤刃石斧）、同県小田原市中里遺跡（筆者実見）から出土している。中期後葉になると、集落が多く確認されているためその出土数も激増している。同石材製石器の太平洋岸での出土分布は広く、静岡県浜松市角江遺跡（太形蛤刃石斧）、愛知県豊田市川原遺跡から同石材製の環状石斧が出土している（服部信博ほか 2001）。この緑色岩製磨製石器の分布は、先に見た弥生時代中期前葉までの信州系黒曜石の流通範囲と重なる（第４図）。つまり、緑色岩製磨製石器の流通は、大陸系磨製石器ならびに折衷系磨製石器という新たな石器器種の流通であるが、その基盤は縄文時代後期以来の黒曜石の流通により形成された地域間交流が、物資を替えることで、弥生時代中期後葉に至まで影響を残しているのである。

4　三浦半島の海人集団の黒曜石と貝輪（弥生時代中期末葉から後期初頭）

弥生時代中期中葉から流通した神津島産黒曜石は、弥生時代中期後葉の始まりのころに流通が止ま

る。その背景には、原産地である神津島および流通の拠点であった三宅島など伊豆諸島中部での火山噴火による継続的居住の断念がある（杉山・斎藤ほか 2007）。再び黒曜石が多く用いられるのは、中期末葉（宮ノ台式土器後半）から後期初頭である。この時期の黒曜石流通の姿を的確に表しているのは、神奈川県三浦市赤坂遺跡である。赤坂遺跡では 37 点の黒曜石が出土している。その中で神津島産は 27 点である。ここで注目すべきは礫の形状である。中期中葉では、こぶし大の円礫が南関東地方に持ち込まれていたが、赤坂遺跡で出土する黒曜石の自然面に円礫面は管見の限り見られない。礫の自然面はすべて節理面である。つまり、この違いは、中期中葉では、神津島の海岸もしくは海底の円礫を主に採取していたのが、中期末葉になると、海面下数mの海底の岩脈からの黒曜石を引き抜くという直接採取が想定される。

赤坂遺跡と同じ頃、三宅島にココマ遺跡が営まれる。この遺跡は、弥生時代中期末から後期初頭の土器・石器とともにオオツタノハ貝を用いた貝輪の生産を行っている（杉山・鷹野 2008、忍澤 2008）。オオツタノハ製の貝輪は主に縄文時代後期から関東地方に流通した腕装飾品である（第 5 図）。これまで弥生時代の同製品についてはあまり注目がされてこなかったが、三浦半島の海蝕洞穴を中心に茨城県まで出土している（戸谷 2002）。ココマ遺跡から出土する土器は、三浦半島の土器と類似しており、両地域間の交流が想定される。また、同遺跡出土の黒曜石は管見の限り、赤坂遺跡と同じように自然面はすべて節理面のみであり、石器の観察からも両地域間の類似性が指摘できる。そして、この弥生時代中期から後期の移行期は、三浦半島で海蝕洞穴が非常に多く見つかり、その洞穴からも貝輪が多く出土している。オオツタノハ貝は、岩礁地帯に生息する貝類であり、その採取に潜水技術は不可欠である。つまり、オオツタノハ貝・節理面を持つ黒曜石はともに三宅島や神津島の航海技術・潜水技術に長けた海人集団の介在を無くしては、獲得することが出来ず、それらの母体が三浦半島の南部の拠点集落ならびに海蝕洞穴遺跡の生業活動と深いつながりがあり、縄文時代以来の貝輪習俗・黒曜石の流通を支える基盤が残されていた一例である。

おわりに

本発表では、石器観察したうえで、弥生時代においても縄文時代以来の物流ネットワークの基盤が強く影響していることを指摘した。こうした構造も、弥生時代後期になると石器がほぼ消滅し、鉄器が本格的に流通することから、新たな基盤を求めていくことになる。石器の研究は、形態からの型式学的研究・石材産地からの流通の研究・使用痕分析からの機能の研究などから、当時の人々がどこから入手し、どのような石器をどのように用いていたかを表すものである。それらを一つ一つ解き明かしていくことによって、先史・原始時代のヒトの姿が見えてくるのである。

<付記>本発表1～3は2006年度に駒澤大学大学院に提出した課程博士学位請求論文をもとにしている。4は2007年に筆者等のココマ遺跡学術調査団が行った調査分析であり、平成19年度 三菱財団研究助成「伊豆諸島先史時代遺跡の研究－考古学と火山学の学際的調査－」の研究成果の一部である。ココマ遺跡の発掘調査報告は2008年夏の刊行を予定している。

<引用文献>

安藤広道 1997「南関東地方石器～鉄器移行期に関する一考察」『横浜市歴史博物館紀要』第2号 横浜市歴史博物館

安蒜政雄・島田和高 2001『鷹山遺跡群Ⅴ』長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団

池谷信之 2003「潜水と採掘、あるいは海を渡る黒曜石と山を越える黒曜石『黒耀石文化研究』第2号 明治大学人文科学研究所

池谷信之 2005『黒潮を渡った黒耀石・見高段間遺跡』新泉社

池谷信之 2007「第6章 縄文的石器製作体系の解体」杉山・池谷2007 所収

石川日出志 1994「東日本の大陸系磨製石器」『考古学研究』第41巻 第2号 考古学研究会

忍澤成視 2008「ココマ遺跡におけるオオツタノハ製貝輪生産」『東京都三宅島ココマ遺跡2007年発掘調査 第1回中間報告会 予稿集』島の考古学研究会

佐原眞 1975「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座 日本歴史』第1巻 岩波書店

杉山浩平・池谷信之 2006・2007『縄文・弥生文化移行期の黒曜石研究』Ⅰ・Ⅱ

杉山浩平・斎藤公一滝ほか 2007 「弥生時代における伊豆諸島の集落と火山噴火の関係」火山都市国際会議 島原大会予稿集

杉山浩平・藁科哲男 投稿中「埼玉県小敷田遺跡出土サヌカイト製打製短剣について」

杉山浩平・鷹野光行 2008「三宅島ココマ遺跡の学際的調査」『東京都三宅島ココマ遺跡2007年発掘調査 第1回中間報告会 予稿集』島の考古学研究会

鈴木正男 1975「フィッション・トラック」『日本の旧石器文化』Ⅰ 雄山閣

田上勇一郎 2000「黒曜石の利用と流通―縄文時代中期の関東・中部地域について―」『Archaeo-Clio』1 東京学芸大学考古学研究室

戸田哲也 1999「東日本弥生農耕成立期の集落 神奈川県中里遺跡」『季刊 考古学』第67号 雄山閣

西野雅人 2007「第3節 特徴的な出土遺物」『千葉東南部ニュータウン37 千葉市六通貝塚』千葉県教育振興財団

服部信博ほか 2001『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

馬場伸一郎 2001「南関東弥生中期の地域社会(上・下)」『古代文化』第53巻 第5・6号 古代学協会

馬場伸一郎 2007「弥生時代の物流とその背景」『中部弥生時代研究会 発表要旨』

山内清男 1939「日本遠古之文化 六」『ドルメン』9号 岡書院

藁科哲男・東村武信 1983「石器原材の産地分析」『考古学と自然科学』第16号

<挿図出典>

第2図 横田洋三2004「準構造船ノート」『紀要』第17号 滋賀県文化財保護協会、中川律子1996『角江遺跡Ⅱ』遺物編2 静岡県埋蔵文化財調査研究所　第5図 三宅村教育委員会所蔵資料 筆者撮影　そのほかはすべて筆者作成

大陸系磨製石器

石庖丁・大形石庖丁・石鎌・太形蛤刃石斧・柱状片刃石斧（抉入も含む）・扁平片刃石斧ノミ形石斧・石剣・石鏃・石製紡錘車・管玉

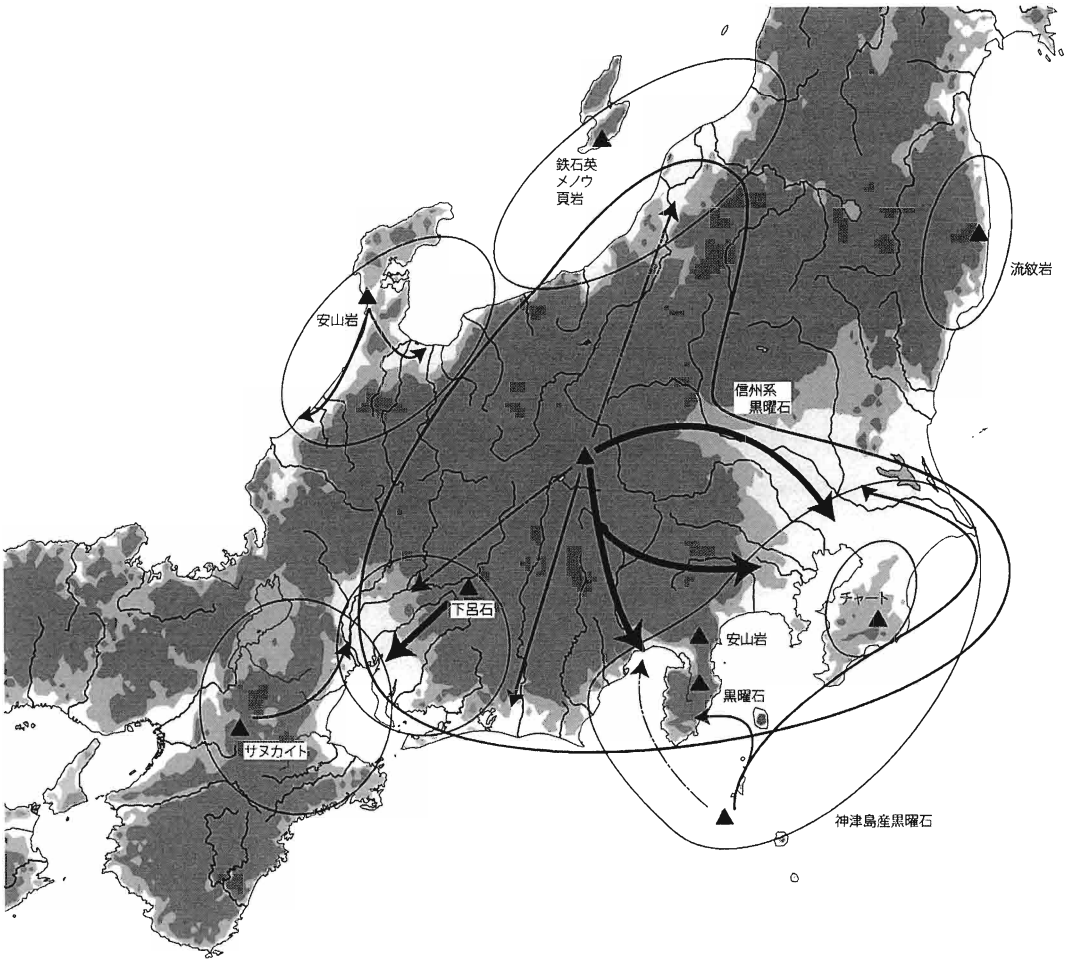
縄文系石器

打製石鏃・打製石斧・剥片刃器（UF・RF）・石錐・定角式磨製石斧・磨石・石皿・敲石

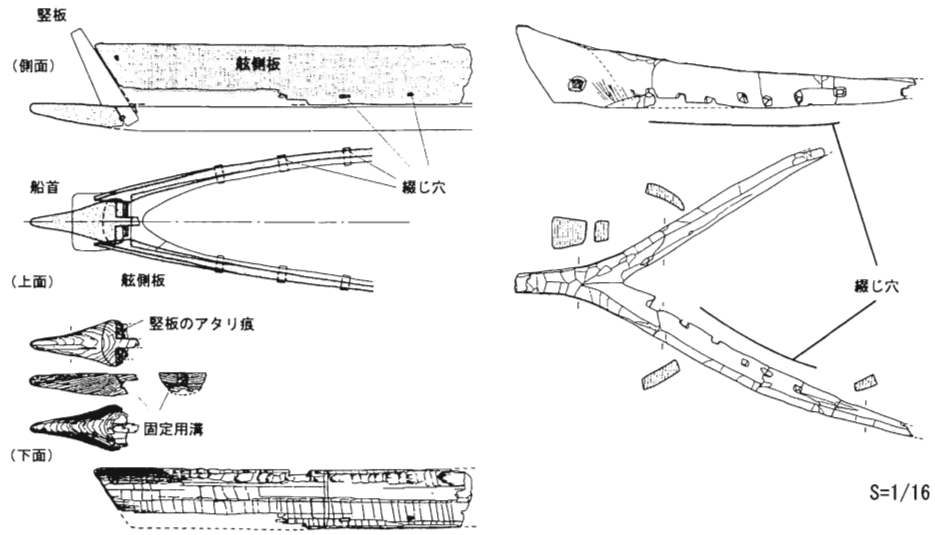
折衷系石器

石鍬・大形直縁刃石器・石小刀・打製短剣・有孔石剣・有角石斧・石戈

表１ 弥生時代の石器の分類

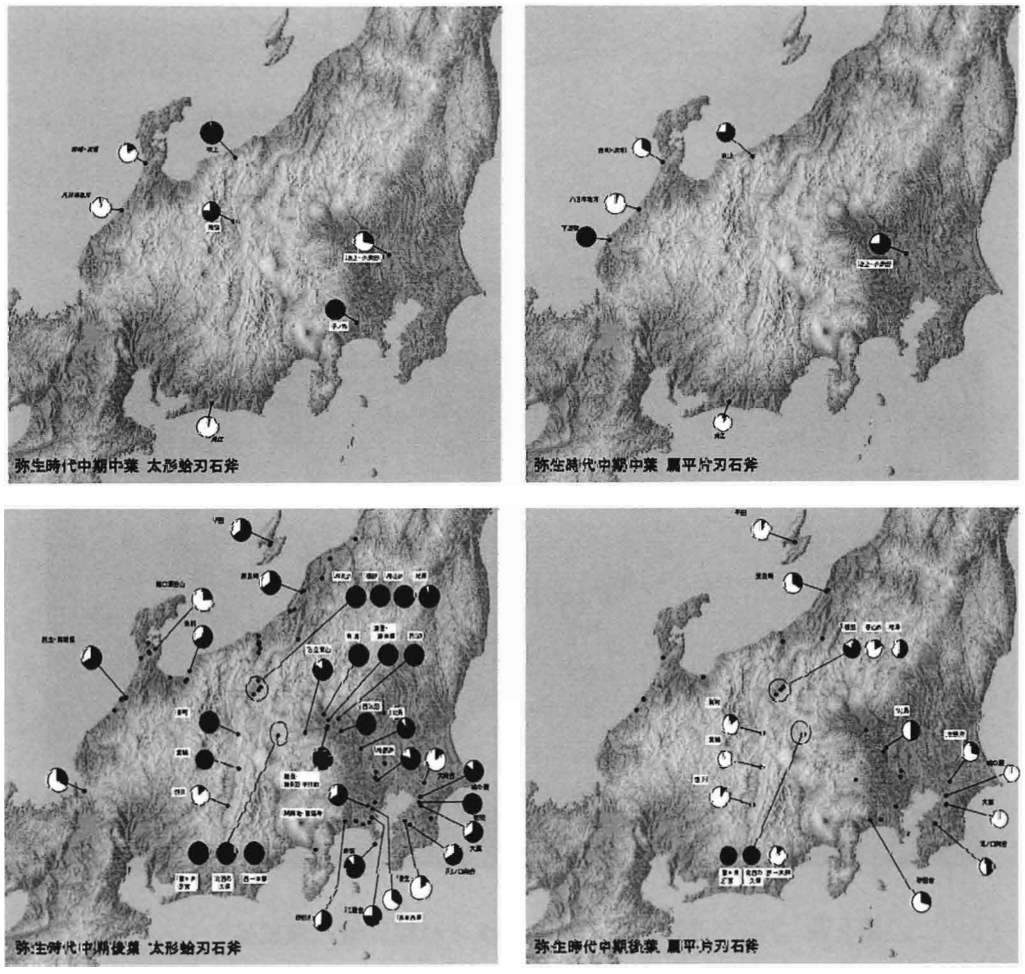


第１図 縄文時代後半から弥生時代前期の石器の流通

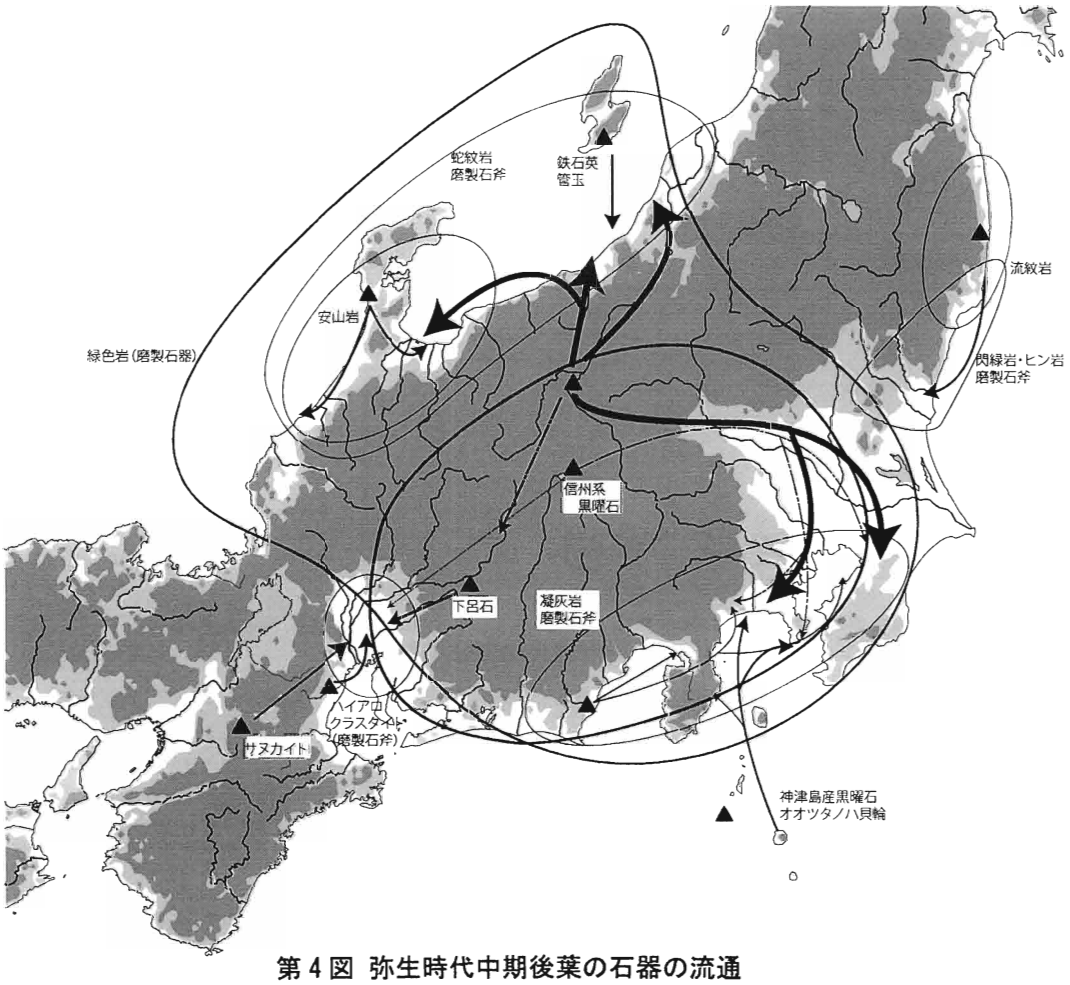


滋賀県 赤井野浜遺跡（弥生時代中期）　　静岡県 角江遺跡（弥生時代中期）

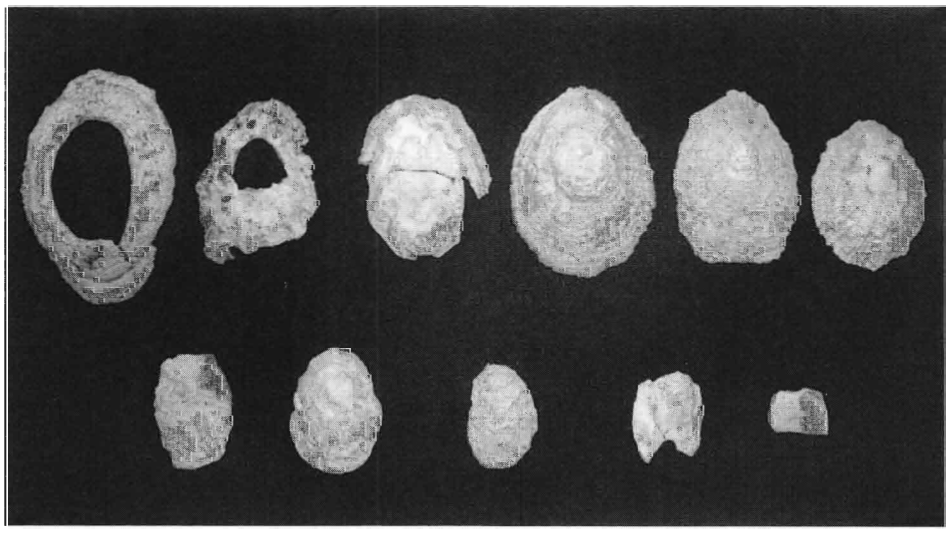
第２図 弥生時代の準構造船



第３図 緑色岩製磨製石斧の分布



第4図 弥生時代中期後葉の石器の流通



第5図 ココマ遺跡出土のオオツタノハ製貝輪と未成品